

と言ふやうな不完全なものではない。山のこちらから、月を見るからこそ、月が遮ぎられて暗いので、さへぎられてゐるのは、月ではなくて眼なのです。

山の向ふでは月が出て明るく見える。

月は山の上に出ようと出まいと、常に明るいのです。

月の影を見て、月が缺けた。三日月になつたと思ふやうでは、本當の月相にふれたのではないのです。

本當の自分を悟ると、人はその瞬間から金剛不壞の體となる。何となれば、體は念の影、念が變れば自ら體が變るからです。

この本もの、自分を悟ると、私の平素言ふ

「ウーム、大丈夫」の境地に入れるのです。

眞の元氣はこゝから出てくるのです。

いのちは全し。

冒されず、狂はず、缺けず、破るゝことなし。之が本當のいのちです。
いのちの眞の相を悟ると、人はその時から絶對の健康となるのです。

(四) むすび

結局、私の健康法は、捉はれぬ心を持ち續けて、滞らないのちを悟つて、健康や疾病に心を勞さない、體や心のことを曾て氣にしたことのないといふ事になるらしい熱が出たとて、下痢したとて、胸が痛いとして、之で必ず良くなると信じて、苦にしない人は、何時でも健康だ。私はいのちは健康になる以外のはたらきを營まぬと思込んで、眠れることも眠れぬことも、飯のこと、間食のこと、寒さ暑さ、冷熱にも一向滞らない。

かつて、健康でありたいと希望したこともなく、祈念しても無病を願つたことはない。

いのちのことなら、私の方が神さまより、佛さまより精しく、確かだと信じてゐるからであるらしい。

ともあれ、體のことを氣にしたことも、物の動きを苦にしたこともない。

花が咲いた、よし、風が吹いた、よし。

雨よし、晴よし、雷がなつた、よし。疲れた、今夜は睡つて見ようかな、と云つた心境。

無礙自在。可しも可からずも私の日課にはない。せねばならぬ、そんなものはない人は眠らねばならぬ。着ねばならぬ、食はねばならぬ、働かねばならぬ、休まねばならぬ、死なねばならぬ。等々。

ならぬならぬ、ねばならぬを澤山並べる。しかし、私らの人世はそんなものではない。欲するから行ひ、求めるから生じたのだ。

したいからしたのだ。したくないからしなかつたのだ。「ねばならぬ」そんなもので

はない。断じて私はいのちの欲するがまゝに生きて、自然と調和し、世に適應し、求むるまゝに生きて、道を外づさない。

たゞ樂だ、嬉しい。

断食療法の話を知くと、飯を食ふことが氣にかゝる、恰かも食ふといふ事が悪いこととのやうに。玄米食普及の聲を知くと、白米を食ふのに氣がひける。病毒を食つてゐるやうに思はれる。肉食が悪いといふ話を知くと、當分肉食することが怖い。

元來、悪いものならば、他のものを食する時よりも、胃袋に餘計働いて貰はねばならぬのに、おどしつけられたのでは、その反對に胃袋の働きはより鈍らざるを得まい。食ひ過ぎたと心配することも同じ様な間違ひで、心配して胃袋が働くなら宜しいが、心配や恐怖は胃袋を鈍らせるのだから、食ひ過ぎたなら逆に愉快になるべきではないか。諸君よ。食へ過ぎて心配したら損害の二重負擔だ。

開け放しが良いと信じた人が、閉めきつた室へ通されたら息苦しかつた。薄着のよ

いことを教へられたから止むなく厚着をしたら、その日は飯が不味かつた。胚芽米のよいことを承知した人が、他家へ行つて白米の御馳走を出されたら食へなかつた。無理に食つたら腹をこわした。

小食主義の人が大食したあとに、ビクついてゐることは、澤山食はぬと營養が足りなくなると、お菜の少いことにブツ／＼言ふて居る人と同じ行爲と見做すべきだ。水の効能を信じて茶も飲まぬ人が少くないが、之は果して水を飲むことに徹底したのであらうか。

もつと精神養生に徹底すべきだ、精神養生は形式ではない。

一日働いてた人が、働きが今日は足りなかつたせいか飯が食へぬと、こぼしたなら罹病して寝てゐるから飯が食へぬ、動かぬから腹が減らぬといふ人も、飯が美味くなかつたから働けぬと言ふ人も、決局同様ではないか。

眠りは量より質の問題だと教へられて眠り過ぎたことに氣を腐らしてゐる人があれ

ば、同じ時間、同じ深さに眠つて寝足りない、こぼしてゐる人と同断。

悟つたのではない。

捉はれてゐることは同じ。

無礙であらねばならぬ。べし、べからず、は捨て、しまひなさい。

不潔が氣にならなくなつたら、清潔にすることが悪いことのやうに思ひ込む人は、清潔でないと思ひ込むやうに思ひ込んでゐる人と變りはない。

五官に捉はれることも良くないが、五官を捨てたことに捉れてゐるのも良くない。生悟りはいづれにしても困る。

坦山和尚は旅中で或る時、一婦人を背負ふて川を渡した。宿に著いてから同伴の僧の曰く。貴僧は、身の僧籍にあることも忘れて婦人を負ふなどは怪しからぬではないか。

坦山、笑ふて答へたのに「君はまだ女をお負つてゐたのか。わしは疾づくにあすこ

へおろして来たのに」

それで良いのだ。

心に滞り捉はれがなくなると、いのちの働きは無礙となつて、人は自ら健かとなり康らかとなる。健康になると、自ら食欲も性慾も正しくなり、動作も活潑、頭腦も鋭敏となる。大酒の癖も自ら改り、少し飲んでも快く酔ふ。煙草も自ら少くなるし、偏食もいつの間にか矯正され、姿勢は正しくなる。寒くなく、暑くなく、眠りも次第に少くなり、努めずして慾が適當に調節され、自然の生くる道に叶ひ、無阻成長のより良くなる道に達する。生活も従つて滞りなく、すらすら進んで止ることがない。

幸福も繁榮も自ら來り、何をしてもし易々と行へる。本當に樂々悠々、樂しみ喜び乍ら愉快な人世に生くることが出来る。

講習……四日間……金五拾圓也。

野口法講話會

毎月七日。

會費不要

その他、座談會。

研究會。

講習會を開催す。

會場………東京市淀橋區下落合三丁目一四一九番地自然健康保持會

九、太靈道靈子術

太靈道靈子術は故人田中守平氏の創始せられた精神療法であつて、その全盛期に於ては全精期に於ては全精神界を席捲したことは、讀者の記憶に今尚ほ新なるものがある。田中氏は、宗教、道徳、哲學を既に舊時代の遺物として却け、太靈道こそ、宗教の如く信仰を強ひず、哲學の如く空理を説かず、道徳の如く思想を束縛せず、太靈自然の大道なりと主張し、多數の共鳴者を其の傘下に集めたのであつた。

太靈道は其の内容極めて廣汎にして、教部、想部、學部、術部、律部の五部門に分たれ、各部は夫れ々々相連關して一體を爲してゐるが、本項では、特に技術的方面、實習方面に關係ある術部門のみを紹介するに止める。

茲で一言して置かねばならぬことは、太靈道本院の現況である。同院は前述の如く一時隆昌を極めたが、田中氏没後は漸く衰運に向ひ、多數の門下も四分五散の形とな

つた。この間に在つて、太靈道を孤守し、それを全盛の昔に盛り返さんと努力した人々に福岡別院主司吉松宏城、廣島本部主司畠山是眞、小倉別院主司中川喜久馬、岡山別院主司福岡熊次郎の諸氏があつた。然るに吉松氏は田中主元の一週忌に際して逝き中川氏その跡を襲つて福岡別院を繼承し、福岡氏は看板の塗替へを爲し、現存せるは畠山、中川の兩氏のみであつて、終始一貫太靈道の弘通、復興に専念して居られる。本項は特に中川喜久馬氏の御援助に負ふ所が多いことを記して置く。

太靈道靈子術

太靈道は田中守平氏の創設によるものにして、其内容は極めて廣汎にして左の五部門より成立つてゐるも(教部、想部、學部、術部、律部)茲には術部門即ち靈子術のみを掲ぐる事とし、先づ以て斯道の主張とする左の一文を紹介して参考に資せん。

精神の安立と肉體の健康

二〇四

凡そ人の世に處する先づ精神の安立を獲なければならぬ。又肉體の健康を得なければならぬ。而も此精神の安立と肉體の健康とは如何にせば獲得する事が可能であらうか。先づ精神の安立を得るに於て舊時代には宗教なるものあり、道徳なるものあり、哲學なるものあり、以て人類の思想を導いて精神的安立を得せしめようとしたのであるが、時代は進歩してゐる。進歩したる時代には進歩したる修養法が必要である。最早や現代人には舊時代の遺物たる宗教、道徳、哲學と云ふものでは餘りに時代後れであつて到底満足することが出来ぬ。人々は今や古き思想の衣を棄て、新しき思想の衣を着けなければならぬ時代となつてゐる。此機に際し勃然として興起し來れる太靈道が今や靡然として堅實なる思想階級に向つて發展し、到る處に太靈道賛仰研究の聲高きは是れ全く太靈道の主張が時代の要求に合致せるが故である。太靈道に於ては徒

らに宗教の如く信仰を強ゆることなく又哲學の如く空理を説かず、道徳の如く濫りに思想を束縛せず全く太靈自然の太道であつて宗教、哲學、道徳を超越してゐるのである。而して太靈道に叙ぶる所の思想は直ちに人類實生活の上に實現することが出来るのであつて、個人として一家に對しても國家に對しても、社會に對しても、宇宙に對しても、將たまた太靈に對しても全く安立したる精神を以て處することが可能得るのである。是れ實に時代の光明、人類の先導、社會の救聲たる所以である、人々須く先づ此光明に浴し此先導に従ひ此救聲に應じて以て靈化安住の境地に到達しなければならぬ。

而して之れと同時に肉體の健康を得なければならぬ。然るに現代人は多く不健康であつて之を濟ふには單に醫術あるのみである。併し世上醫術に依つても治癒し難き數多の疾病あるはこれ抑も何が故であらうか。こは畢竟人間の生命を物質的にのみ解釋してゐて、單に藥品や器械の物質力に依つて治癒せしめやうとするからであるが、而

も病氣そのものが物質的のものでなく、全く生命現象に即して居る以上到底完全なる奏効を期することは不可能である。茲に於てか近來は物質的療法たる醫術に對して精神的療法が盛に行はるゝ様になつた。然るに是等の精神的療法の中には患者の信仰を基礎として居るものもあつて、若し信仰せざるに於ては効果を奏し難いことゝなつてゐる。斯の如く信仰して治癒るといふ時は夫は患者自身の心理状態に依る者であつて特に療法を施して効果が有つたと云ふことが出来なくなる即ち施術を受くるも受けざるも唯單に信仰さへあらば無病といふことになる。併し疾病は物質的のみでないと同様にまた精神的のみの現象でもないのである。之を以て精神的信仰に依る治療法は矢張り効果の完全を望み難く不得要領に終ることが多い。

然るに茲に言ふ靈子作用に依る療法は、全然藥物器械を用ゐざるは勿論であると同時に更に患者に信仰心を要することがないのである。即ち物質力にも依らず又精神力にも依らざるものであつて、全く超絶したる靈的方法である。そして此作用は誰人にも

も極めて簡易に體得し得らるゝのであつて、修得の上にも、矢張り信念の必要はなく唯一定の型式に依るのみである。また精神統一呼吸法、靜座法を行ふことも全然其必要がない。即ち何等心身を特に修練することなくして、的確完全に此靈能力を體得することが出来るのである。一旦之を體得せば隨時隨處に活現應用すること眞に自在である。

世衆は須らく先づ太靈道に依つて精神の安立を圖り靈子術に依つて肉體の健康を保持し、斯くして自己の心身を圓滿に發達せしむると同時に、更に進んでは他を導きて以て人類をして主全至眞を享受せしむべきである。

靈子術の學理

太靈道の學部門は、論證學、宇宙學、生命學、靈理學、靈醫學、神學等の各科目を構成してありますが、その全部は到底茲に記載はできません故に、是等諸學の基礎と

なり、根柢となり、骨子となつて居ります所の靈子一元論の梗概を略記して置くことに致します、そして此靈子一元論に精通しますれば、學部門のすべてに對して容易に理解し得ることになります。

靈子 太靈道では宇宙並に宇宙間の一切現象は、悉く全き神たる「太靈」の全眞具現によりて創化されつゝある靈子の一元から構成されるものであることを説てあります、靈子とは精神にあらず、物質にあらず、精神、物質を超越して、しかも、精神と物質との根本を爲し、時間と空間とに制限されずして、しかも、時間と空間との源泉を爲す所のものでありまして有形ならず、無形ならず、有形無形を超越して、しかも有らゆる有形無形を發出し來る原因であります、されば精神も、物質も、時間も空間も、有形も無形もすべてが靈子の一元から成り立つて居りまして、この靈子を離れては如何なるものも直ちに全き神たる「太靈」と離るゝの結果となり、斯の如きものは即ち滅亡の外なきに至ると共に、靈子の發動が旺んであればあるほど、能く全き神た

る「太靈」と融合することを得まして、斯の如きものは即ち益々發達することとなるのであります、此故に靈子の作用をして旺盛ならしむるはまことに一切現象が全き神たる「太靈」に通達し、直觸し、融合する上に於ての唯一の神法であることを知り得るのであります。

靈子と精神 靈子は創化の作用を固有して居りまして、その創化作用に積極發動と消極發動との別があり、積極發動は有機發動となりまして、茲に精神を現出致しますこの精神は無形であります、自由自在の性能を具有して宇宙間に遍滿し、隨時隨處に有機作用を營むことになつて居ります、人類に精神があると申しますのも、それは畢竟するに宇宙に遍滿せる精神を受入し之れに感應して始めて我れに精神の發動を見るに至るものでありまして、我自身のみ精神といふものがある譯ではありません。たゞ脳髓其他の機關の上に顯はるゝ靈子作用の程度によりまして、精神受入及び感應の優劣を生じ來るに外ならぬまであります。されば靈子作用の發動を旺盛敏活なら

しむることによりて、精神の發動をして敏活旺盛ならしむることを得るに至るのであります、而してそれには太靈道の修法行事が最も能く此目的を達し得ることになります。

靈子と物質 靈子作用の消極發動は直ちに無機發動となるものでありまして、この無機發動が物質を現出致します、物質は有形であります、しかし、有形と申しましたも必ずしも人間の肉眼に映することのみ標準とはしないのでありまして、たとへ肉眼には視ること能はざる程度になつて居りまして、矢張り物質は有形であります、而してこの有形なる物質は自由自在の消極性能を具有して宇宙間に遍満し、隨時隨處に無機作用を營むことになつて居ります、人類に肉體があると申しますのも、それは畢竟宇宙に遍満せる物質を受入し、これに同化して始めて我れ肉體の構成を見るに至るものでありまして、我自身のみの肉體といふものがある譯ではありません、たゞ肉體の諸機關の上に顯はるゝ靈子作用の程度によりまして、物質受入及び同化の優劣を

現し來るに外ならぬまで、あります、されば靈子作用の發動を旺盛敏活ならしむることによりて、肉體の發達をして敏活旺盛ならしむることを得るに至るのであります、而してそれには太靈道の修法行事が最も能く此目的を達し得ることになります。

生命現象 生命とは「太靈全神」の攝理によりて靈子の積極消極兩作用交乘融合せられて茲に靈格を生じ、その靈格を中心として靈子作用が不斷に積極消極の兩活動を爲し、その積極活動が宇宙精神を受入し、之れに感應し、また、その消極活動が宇宙物質を受入し、之れに同化して始めて構成せらるゝ現象でありまして、隨て靈子作用を敏活旺盛に發動せしむるときは「太靈全神」と直觸融合して精神、物質の兩作用を敏活旺盛ならしめ以て生命をして全眞ならしむるに至るのであります。

現代の科學は著しき進歩を遂げては居りますが、しかし、其根柢が唯物主義に在ります爲めに、未だ生命の本質を明にするまでには至つて居りません。元素より原子へ原子より電子へと進みましても、元素の本質、原子の本質、電子の本質共に明かでない

く、況んや生命の本質に至りましては、之を明かにすること到底科學の企て及ぶ所に
 あらざる實狀になつて居ります、勿論物質から精神が生ずるものとは断定し得ない所
 であります、また唯心論者がいふが如くに生命は精神のみによりて發現し來るもので
 なく、全く物質と精神との根源たる靈子の一元によりて發現し、靈子は「太靈全神」
 より不斷に創化され、攝理されて居るのでありますからして、人類の生命は常に太靈
 全神と直觸の關係になつて居ることも知らなければなりません。

太靈道では獨り人類の生命を認むるばかりでなく、動植物の如きは勿論生命現象で
 ありますが、更らに進むで礦物の如きも、地球、天體の如きも、宇宙全體も共に生命
 現象なることを認めて居ります、たゞその生命現象としての状態なり、程度なりを異
 にするに過ぎないものでありまして、究極一切現象悉く是れ生命なりといふことにな
 つて居ります。

若し宇宙並に宇宙間の萬象が生命でなくして、獨りこの地球上の人類、動物、植物

類だけが生命であるとしまますならば是等の生命現象が無生命現象に寄生して居ること
 になり若くは無生命現象が生じたことにならなければなりません。しかし生命現象が
 無生命現象に寄生するとしてはその寄生すべき生命現象の原因が明らかになりません
 と同時に無生命現象から生命現象が生じ來る道理はないのでありまして、必ずや生命
 より生じなければならぬことになります。殊に人類の如き生命より生じ來ることは到
 底考ふる能はざる所でありまして、而して生命の根本實體は實に「太靈全神」でありま
 して、人類はもとより、萬有すべてみな瞬間刹那と雖「太靈全神」を離るゝことは出
 來ません、しかも、萬有中特に人類は我慾に囚はれて往々に「太靈全神」から遠ざか
 り離るゝに至るのであります、故に常に修行行事によりまして靈子の作用の活動を敏
 活旺盛ならしめて「太靈全神」との直觸融合を期することに心懸けることが最も肝要
 であります。

靈子顯動作

靈子顯動作修得上の心身の準備

靈子顯動作は凡そ靈界に入り靈的研究を爲さむとするもの、最初の關門である。世には靈的研究と稱して其實何等靈的作用の伴はざるものが多いのであるが、太靈道に在つては其靈理學を具現する所の靈子作用があつて、而して顯動作は其修得すべき第一課程となつて居るのである、世に言ふ所謂靈的研究の如く唯だ單に精神を統一し集中する程度のもは敢て之れを靈的研究と稱することは不可能であつて、無論暗示とか催眠とか云ふに至つては全然靈界の問題ではないのである。たとへ精神の統一集中又は暗示催眠等に依つて靈的現象を生じ來ることありとするも、そは畢竟偶然的の現象に過ぎぬのであつて、之れを直ちに純靈的の現象とは稱し得ざるものである。

靈的研究には須らく先づ物心を超越せる靈的作用が伴はなくてはならぬ。即ち靈子顯動作は靈界に志すもの、必然修得せざるべからざる緊要條件である、然らば此顯動作作用なるものは如何にして修得體現し得べきかといふに、此靈理學に於ける靈子顯動作作用なるものは在來の精神又は心靈と稱する方面の研究と全然其根底を異にせるが爲めに、之れが修得體現に際しても其心身上の準備方式に自ら異なるものがある、以下節を分ちて説く所に依り豫め意を用ふべきである。

精神の準備 靈子顯動作を修得體現する上に於て精神上の準備は如何にすべきかといふに、先づ、

精神の統一、精神の集中、默想、自己暗示、自己催眠、無我の境界

等是等の事は絶對の禁條である、元來精神の統一と云ふ事は短期間の修養のみに依つては容易に成し遂げ得べからざるもので、假へ長期間の修養を積むと雖、之れが實現は決して容易と稱すること能はざるものである、假りに容易に爲し得るとするも茲

に云ふ靈子顯動作用の修得體現には全然不要なるのみならず却て障害となる場合が多いのである、唯だ靈子顯動作用を修行中自ら精神の統一せらるゝに至ることはあるもこは全く自然の結果であつて、強て不自然に精神を統一せんと欲することゝ、全然異なるのである。即ち靈子顯動作用の發動に依り自然に精神統一といふ結果の隨伴することゝ、強て不自然に精神を統一せんと欲して遂に得難きに至るものと其間非常の逕延があるのである、精神統一に腐心するの人は寧ろ靈子顯動作用を修行せば、其敢て豫期せざるに精神統一の結果を得ることゝなるのである、勿論靈子顯動作用の場合に其結果として必然的に精神が統一せらるゝことは敢て之れを禁條として排斥するのではない、唯だ顯動作用を發動せしめんが爲めに強て不自然に精神を統一することを却て障礙ありとして禁ずるのである。

次ぎに靈子顯動作用を發動せしむる爲めに特に精神を集中することも亦た等しく障礙となるものである、彼の精神一到何事か成らざらんやといふことを、唯だ單に精神

を一事に集中して熱心となるべき意味に解して、徒らに熱中する時は却て顯動作の起らぬものである、極めて虚心平氣にして熱せず冷せず、唯だ一定の示せる型式を取りて順序正しく執り行ふべきである、普通の事柄は大抵は熱心になれば爲し遂げ得るものであるけれども、此靈子顯動作用修得には徒らに熱心なることは却て妨げとなる、尤も修得せよとの考へは云ふまでもなく必要であり、また相應に熱心でなければ成功するものではないのであるけれども、熱心過ぎて精神を集中する時は不成功に終る事が多い、されば餘りに熱中することなく當初の間は精神の平調を失はぬ様になければならぬ。併しまた特に精神の平調を失はぬ様にとの觀念を強く起して、そのみ注意を拂ひ熱中しても無論宜しくない、要するに顯動作用發現修得といふことに就ては單に一定の型式を執る以外には、殊更らに精神を勞せざることを必要とするのである、其次ぎには默想である、精神の修養等には力めて雜念を離れて默想することを必要ありとする場合が多いのであるけれども、靈子顯動作用修得には此默想は尤も多くの

障礙を生じ來るのである、默想は自然に精神の統一を伴ひ、精神の統一は遂には精神の集中となり、却つて顯動を抑制するの結果を生ずるのである。顯動作用は極めて劇烈活潑に發動し來るものであつて、冷靜に默想して居るといふ様な性質のものではないのである、即ち陰鬱なる默想に耽るといふの類でなく、頗る陽性的に活動するのであつて、而かもそれが精神的でなく、又た單に身體を運動せしむるといふのでもなく内面より自然に發動し來る靈子の作用の爲めに、身體自ら靈的に活動を餘儀なくせらるゝに至るもので、到底默想を爲し得る如き穩かなるものではなく、床を鳴らし、室内を飛び廻り全くの靈的運動を爲すものである、されば默想等とは其内容形式共に異なるもので、隨て默想は却て顯動の障礙となるのである。此點は深く了解し置くことを要する、然れども靈子顯動作用修得以外の場合に在りても尙ほ且つ默想を排するといふのではない、唯だ顯動作用の場合に於ては默想は障礙となるといふのみで、其以外の場合には默想も亦た修養上効果あり必要なことを認むるのである。

その次ぎには彼の自己暗示である、自己暗示といふことも必ずしも其事實を非定するにあらざるも、唯だ靈子顯動の場合には却て障礙となるものである、且つ自己暗示に依つて何等か靈的の現象を生じ又は實際の上に効果ありとせば、それは暗示そのもの結果ではなくして、實に自己暗示に依つて不知不識の間に靈的作用の發動を來たすものであつて、此場合自己暗示は單に動機となるに過ぎざるものである。されば靈的作用の顯現發動は敢て暗示に依らずとも之れを爲し得べく畢竟自己暗示そのものが直ちに靈的作用を生じ來るのではなくして、それに伴隨する所の現象状態たるに過ぎぬものである、されば暗示を爲したるが故に必然的に靈的現象を生じ來るのではなく、何れも偶然的であつてまた暗示を施すことなくとも靈理學の教ふる方法に従ふ時は必然的に靈的状态となり得るものである、而已ならず暗示に依りて却て自己の靈的發動を妨害さるゝこともあるを以て充分の注意を必要とする。

其次ぎは自己催眠である、自己催眠も亦た自己暗示に外ならぬのであるが茲に言ふ

催眠とは即ち眠を催ふすことを要件として之れを述ぶるのである、催眠術には無催眠の催眠と言ふことあれど、元來眠を催ふすことなくして眠を催ふすといふが如きは殆んど何の意味たるやを解し難く又た事實に於て眠らずに眠るといふが如きは絶対に不可能である、即ち諸種なる靈的現象に對して催眠術にては解釋し難き事をも、尙ほ且つ催眠術として説明せんと欲するが故に遂に斯る用語を爲すのであつて、若し無催眠の催眠なる事實があるとすればそれは實は催眠術ではなく、全然催眠以外のものと認むべきである、或は普通の催眠術が原因して此結果を生ずるに至るとするも、それは催眠術に依らずして爲し得る場合もあると同時に、原因が催眠であつたから其豫期せざりし偶然的の結果迄が等しく催眠術の部類に屬すべきものであるとは稱し難ひのである、随つて催眠とは全く眠を催ふす程度を限つて催眠とすべきであつて、彼の無催眠の催眠など稱することは嚴密なる意義に於て、其用語も事實も共に認むべからざるものである、而して靈子顯動作作用の場合に在りてはこの眞實の意義に於ける催眠、即

ち眠を催ふす所の催眠は非常の障礙となるものであることを知らなければならぬ、靈子顯動作作用は眠を催ふすと云ふが如き性質のものではなく、頗る活潑劇烈に身體が靈動するのであるから、若し催眠の習慣ある人が催眠しつゝ顯動を爲すといふことは不可能である、尤も偶然的に催眠中顯動を生じ來る等の場合もあれど、それは催眠其もの直接の效果に依つて顯動し來るものではなく、夫等の人は催眠せずとも顯動を發現せしむることを得るのである、之れを以て平素他人に催眠を施し又は自己催眠等の習慣ある人が靈子顯動作作用を修得せんと欲する場合には、全然在來の習慣に捉はれざる様にするのが肝要である。

其次は無我の境と稱する一種の精神状態である、元來無我とは我が心を外界の事物に捉はれざる様に、外界の爲めに我が心を勞することなき様に努むるの謂であるが靈子顯動作作用の場合には此所謂無我の境なるものが尤も著しき障礙となることが多いのである、殊に強て無我たらんと欲するが如きことあらんか到底此作用は發現し來る

ものではない、即ち無我たらんとする意思の加はるは宜しからざると共に、無我となり了することも亦た等しく障害となるのである、尤も單に精神上の修養を爲す等の上よりすれば所謂無我の境に入らんと欲することは固より必要あり、且つ極めて尊重すべき事柄たるは論なき所なれども、靈子顯動作用は單純なる修養にあらず又た作用を自己自身に體得發現せしむるの要あるが故に無我の境に入らんと欲するが如き努力は却て此作用の發動を抑制するの結果となるに至るのである、彼の禪を修めたる人々は往々にして靈子顯動作用の修得を無我的修養法の一と考へて、顯動發動の際殊更らに無我となり、爲めに作用の發動自ら敏活を缺く事がある、禪は確かに高等修養法の一たることは認め得べきも、靈子顯動作用を直ちに禪的乃至無我的と解することは非常に誤つて居る、されば禪の修行を爲したる人が此靈子の顯動作用を修得せんと欲する場合には力めて其在來の禪的慣性を改めて虚心平氣となる様に心懸けなければならぬのである。

以上叙べ來れる如く靈子顯動作用の修得には先づ精神統一、精神集中、默想、自己暗示、自己催眠、無我の境界等共に障礙となることが多いのであるから、此等の點に注意をしなければならぬ、然らば精神を如何なる状態に置けば最も適當であるかといふに、即ち

超我の境に入ることをも以て理想的の精神状態とするのである、超我とは自我を超越したる意味であつて、敢て精神を統一集中することもなく、又た默想することもなく自己暗示、自己催眠は勿論、無我の境に入る等の事柄とは全然異り何等自我に拘泥せず、周圍に拘泥せずたとへば雜念起らば起る儘に、妄想生せば生ずる儘に而も雜念を起さんともせずまた之れを止めんとせず妄想を生せんともせずまた之れを止めんとせず謂はゞ自己精神の發動は全然自然に任して眞の超越的態度を持するに在るのである、尤も超我の眞意義を詳細に述ぶる時は唯だ單に自己精神の發動に抱泥せず、外界周圍に拘泥せずといふのみではなく、最も深き意義を有するものなれども、茲に靈

子の顯動作用を修得する上に於ての自我超越の態度は必ずしも其深甚の意義に徹底するの要を見ないのみならず、超我に徹底せんと欲して却て超我に徹底せんと欲する念慮の爲めに捉はるゝに至ることがあるから、唯だ内外一切に拘泥せざることを程度とすればよいのである、併し強て内外一切に拘泥せずと考ふることは固より超我ではないのであつて、全く自然に内外一切に拘泥せざる様にならなければならぬ、殊に強て超我にならうと力むるのは却て超我でないから此點を充分了解することを要する、畢竟自我及び周圍に拘泥せず又た強て超我たらんとも爲さざる状態にあれば、以て靈子顯動作用を修得する上に就ての精神上の準備完たしといふことを得るのである。

肉體の準備

既に靈子顯動作用修得上精神に就ての準備は超我の境に入るを必要とする、之れと同時に肉體上の準備は如何にすればよいかといふに、先づ正座し又は正立して一定の

型式を取るのであるが、此時姿勢が型式に適はず、又は不自然に力を置めたりなどする時は却て作用の發動を抑壓するの憂があるから、力めて自然に任せ以下の圖解通りの態度を持つことが肝要である、尤も正座と言ひ正立と稱するのは之れを靜座靜立の意義に解してはならぬ。靜座靜立は唯だ單に靜かに座し又は靜かに立つといふのみであつて何等の深き意味を有するものではないのであるけれども、爰に正座と云ひ正立と云ふのは前節に叙べたる如く其精神を超我の境に置て最も正しき状態を保ち、其肉體をも亦た最も自然に任して些の窮屈なく正しき状態にしなければならぬのである。總て靈子作用の修得には精神上に在つても肉體上に在つても共に不自然なる状態を正しからぬものとして排斥するのである、爰に肉體上の注意としては假へば腹部に力を置むるにしても、強て不自然に力を置むるのは宜しくない。而已ならず却て顯動作を抑制することゝなる、無論腹力は平素に在つても必要であるけれども、それが自然の腹力でなければ寧ろ害あつて効なきものとなるのである、されば特に靈子顯動作の

際には強て殊更らに腹力を充實せしむることをせず、自然の腹力充實を程度として居ることが最も必要である、又た靈子顯動作用の發動には最初に於て眞點と稱するものがあるが、其眞點に餘りに強き力を單むる時は却て障礙となることが多いのである、總て何れの場合に在つても不自然に力を單め過ぎるのは宜しくない、斯くの如く總て自然に任するを最も適當とするのであるが、尤も靈子顯動作用の體得は本來ならば或る期間絶食を試みて、其絶食中に發現體得するに至るを順則とするものであるが、併し茲には是等絶食等の事柄を要件とせずして體得することを得るやうにして居る、されど靈的に何等の素養もなく、又た殊更ら修養の方法をも講ずることなくして突如此作用を體得するには、其當初に於て多少の生理作用の加はることあるは時に依つて止むを得ぬ場合がある、否な寧ろ幾分の生理作用を以て誘發することを必要とすることもある、即ち筋肉を緊張せしめ、血液を充迫せしむる等の關係は自然免れ難き場合もある、唯だ併し之れには相應の程度があるので徒らに力を單めて筋肉の緊張、血液の

充迫を爲すことにのみ心懸けては却て作用の發動を抑壓するの結果となる、されば前にも説ける如く普通以上不自然に強大なる體力を加ふるの必要はなく、單に合掌、又掌等の場合に於て其合掌なり又は又掌なりが充分に保たるゝ程度に依り、唯だ眞點に少しく力を單むれば足るのである。

而して此筋肉の緊張とか、又は血液の充迫とか云ふことは唯だ單に作用發現の當初だけのことであつて、一旦此作用が發動することゝなると以後は何等寸毫も筋肉を緊張せしむる必要もなく、また血液を充迫せしむる等の事柄も無論不要となるのである、即ち單純に顯動作用を發動せしめ様とする意思を持ちさへすれば、隨意隨所に顯動し來るものである、但し自由自在に發動するに至るも特に此作用の神聖を保持する爲め徒らに他人の眼前に於て試むることは門規の絶對に禁ずる處であつて、之等は充分の注意戒心を要する、畢竟單獨に一室に在つて之れを行ふか、又は森林、海邊、原野孰れに在つて行ふも敢て支障なきも、唯だ他人に此作用を示すは全然禁條と心得なければ

ばならぬ。

時刻の注意

以上述ぶる處の精神上の準備と而して肉體上の準備とが全きを得たならば、以下に講授する圖解の順序に従ひ一々實行する時は極めて容易に此絶妙なる靈子顯動作を體得顯現するに至るのである、然れ共尙ほ茲に注意を要するは實行時刻の問題である。即ち靈子顯動作體得發現には如何なる時刻が最も適するかといふに、それは夜間午前零時より同二時迄の間が極めて絶好の時刻である、固より晝間と雖顯動作の發動に敢て支障なきが故に、若し夜間の時刻を選び難き人は隨意晝間に行ふべきであるが唯だ最初體得するのは前記の時刻が至極好いのである、四隣閑寂地上の萬物咸な悉く眠りに入れるの深夜、獨り端然として心を正し身を正し、正座して瞑目し、一定の型式を取りて、

全真太靈！ 々々々々！ 々々々々！

と默唱靈禱するの時、先づ合掌せる指頭に微動を生じ、懸がて稍々急に……益々急に……忽ちにして烈しく……愈々烈しく、遂に全身靈動し來り、座したるまゝ飛び揚るに至る……此刹那の快感！蓋し何物も之れに譬ふべきでない、之れと同じく正立したる時も等しき顯動を生發し來るの瞬間全く我を忘れ、周圍を忘れ、乾坤一致、神人合體真に太靈と自己と融會せるの絶妙感！洵に靈子作用の深玄不可思議なるを思はしむ。(二二五頁以下に圖解云々とあるも其の圖解を脱落せしことを、讀者諒せよ)

以下、座式顯動作及び型式を詳細に教授せんと欲す。諸士須らく體得修練以て靈我一如の絶妙靈感の境に入るべし矣。

座式顯動作

正座 座式顯動作を修するに當りては、先づ正座して姿勢を整ふるを要す。正座

とは単に靜に座するといふ意味でなく、心と體と共に正しく座さなければならぬ。其の座り方は前は膝頭を廣く、後は足の重なりを淺く右掌は左掌の上に置き、瞑目し、「全真太靈」々々々々と謹んで黙唱するのである。

座式の型式

兩腕前伸 正座して姿勢を整へたならば、次には左右兩腕の筋肉を緊張せしめ、手指を互に密着せしめ、手掌に充分に力を加へ前に伸すのである。此際手掌に満身の力を罩む。特に注意すべきは帶及び禪の類を餘り強く締めぬ様に又た服装は窮屈ならぬ様成るべく寛かにするを要する。

合掌 兩腕の筋肉を緊張せしめて充分に之れを前伸して後には兩臂を水平に張つて合掌するのである。合掌の際には左右手掌の中指の下部を中心として力を罩め、兩臂は横に真直に、拇指を胸部より約一寸程離して居る。斯くの如くして瞑目し、「全真太

靈」々々々々と黙唱を繰り返すのである。

横動、顯動の修法には眞點といふものがある。それは力を罩む箇所を云ふので、座式の時には左右手掌中指の五分程の下部である、即ち正座、合掌、瞑目して此の眞點に輕き力を罩め黙唱を繰り返すこと短きは數秒間、長きは數分間にして忽ち横顯動を生じ來る、横顯動とは合掌が前後に横動することである。

縦動 既に横顯動を生じ來る時は、それを繼續して居ると自然に縦顯動即ち合掌が上下に縦動して來るのである。之れに意思を加へると前後上下横動縦動自由である。又横顯動も縦顯動も少しも起らぬといふ時は意思を用ゐて顯動を誘發する動機を與へても差支は無い、同時に意思に依つて顯動を烈しくしてもよいのである。

飛動 横顯動が縦顯動になり其の縦顯動が旺盛になつて來ると單に手掌兩臂のみでなく全身が縦顯動する様になつて來る、此全身縦顯動は遂に座したる儘で座を離れて飛び揚る様になる。即ち飛動して來るのである。飛動の度が激しくなると共に室内を

座したる儘飛び廻るに至る此の飛び揚り飛び廻る時には眼を開いて宜しい。

又掌 顯動は、横動、縦動、飛動迄進めば先づ以て其要を得たるものといふことが出來得る。そして此顯動は前に述べた合掌の型式に依らずして、左右の指を交叉し手掌を合して行ふことも出來得る。之れを又掌と稱するのであるが、合掌と又掌とは執れを用ひても差支はないのである、勿論又掌にも横動、縦動、飛動を生ずる。

曲臂凝掌 曲臂凝掌とは左右の兩臂を屈曲せしめ、手掌に充分の力を疑らして顯動を起すのである。これも初めは前後に横動し、次に上下に縦動し其次に全身飛動するに至るのである。上下動し飛動するに至れば其の飛動を強て抑制することなく、自然に任して置くは尤も必要である。抑制すると發達しないから注意を要する。

曲臂握掌 曲臂握掌は、兩臂を強く屈曲せしめて、手掌を固く力を入れて握るのである、合掌、又掌、曲臂凝掌、曲臂握掌共に拇指が胸部より約一寸程を離れて居る必要がある。而して以上の顯動の場合には自ら筋肉緊張といふ、生理作用が加つて來る

が、これは唯だ顯動發動の當初のみであつて、後には斯の如き生理作用は加はらぬ。

伸臂 伸臂は臂を前に伸ばして顯動を起すのであるが、片臂にても兩臂にても自由である且つ伸臂に至りては最早や筋肉を強く緊張せしむるといふ生理作用は全く必要がない、唯だ單に臂を真直に前伸せしむればよいのである。尤もそれのみにて顯動し來らざる時は手掌に力を凝らし臂を少しく内に曲げるも差支はない。

垂臂 垂臂に至りては唯だ軽く臂を下に垂れ何等の力をも加ふることなく單に顯動作用を發動せしめんと欲するのみにて、自由自在猛烈旺盛に顯動し來るものである。されど若し容易に顯動を來さざる時は、強く手掌に力を罩むるか、又は意識を用ひて臂を動かし以て顯動を誘發することは差支ないのである。

顯動修法は修養及び健康の第一義、靈化に入るの第一歩にして、
萬人が萬人必ず體得の出來るものである!!

靈子力は、常時不斷我等人類の身に應現し、發動してゐる。これを檢する方法は、本書「坐式顯動修法教授

書」第二型式によりて合掌し、手掌の眞點に力を加へ、その中指の先に、鳥の羽毛の極めてしなやかなものを挿む。さうすると、顯動は未だ十分に發動するに至らざるも、その羽毛の先には、自ら顯動が起つて、風なきに微細にふるゝやうになるものである。これは、今いふ靈子力の發動なので、これを認めた上は、更らに顯動修法の各項條を注意して、實修するときは、手臂の上に各種の靈動が起つて、遂に全身の飛動に達する。されば、多くの人々のうちには、顯動が發動しないといつて、半途にして放棄する人もないとはいへないが、顯動修法は發動するのが本來であつて、發動せざるが寧ろ不思議とすべきである。今いふ羽毛を指頭に挿んで、それが動かなくなつたなら放棄しても己むを得ないが、その人が生きて居たなら必ず動く筈であり、動いたなら必ず顯動となるのであつて、數回(毎回十分か二十分)の辛抱であるから、切に動くまで實修されたいのである。

若し羽毛がなかつたならば紙片を兩手掌の間に挿みて指頭より二三寸位外部に現はし、合掌を續けて居ると紙片先づ動き、次に手指動き腕臂動き、全身動くに至るものである。

* * * * *

尚ほ太靈道靈子術に就て蘊奥を究めんと欲せば「太靈道靈子術講授録」(入會費拾五

圓也)の配付を受け獨習せらるべく、又は田中氏没後唯一の後繼者たる中川喜久馬氏に直接指導を受ければ斯術に通曉するは疑ひなし。

講授期間……………(特別講授十日間)……………會費金廿五圓也

普通講授……………五日間……………會費金拾五圓也

會場……………福岡市西公園下太靈道福岡別院

一〇、洗心流靈氣療法

靈療術界に璨として異彩を放つ驚異的存在は洗心會々長權大教正松原皎月氏である。氏の唱道せる「洗心流靈治療術」の特徴は生心靈三理綜合式完全療法である。其の説く所によれば、從來幾萬通りの治病法が世に行はれたるにも拘はらず其の効績の餘りにも微々たる所以は、從來の治療法なるものが一方にのみ偏し過ぎてゐたことに起因するものであるとなし、疾病の因つて起る眞源を肉體、精神、靈魂の三者に認め従つて治療に當つては此の三者の何れに起因する疾病であるかを見究め、然る後に於て其の最も適應せる治療法を施すのである。斯くすれば如何なる難症痼疾も必らず治すべきことを斷言してゐる。

先づ其の生理的療法としては主として靈壓法、自然療法を鼓吹してゐるが、これによつて骨格の異狀、筋肉の異狀、血液及淋巴液の循環障礙、神經機能の障礙、内臓の

轉位、等を矯正するのであるといふ。

心理的療法としては、催眠術療法、氣合療法、精神解發療法等を施行し、これによつて作病的精神の休止、迷妄的潜在觀念の消滅、全快への信念確立、體內諸器關の機能促進等を実現し、以て疾病治療の機轉を與ふるものであるといふ。

更に靈能療法としては、靈氣放射療法、交靈療法、禁厭療法、神傳瞬間療法等を行し、之れによつて、神經及神經中樞の鎮靜、血行の促進、炎症の抑制、病竈の排除、尿酸の分解、醱酵素の活動、新陳代謝作用の促進、細胞力の振起、神靈の冥護による神祕作用、憑依靈の退散、靈的惡因果の解除等の諸作用を実現し、超理論的に難症痼疾を救済するものであるといふ。

以上の如く洗心流靈治療術は其の收むる處極めて廣汎であつて到底其の全般を紹介することは不可能である、依つて左に靈能療法の一分野たる靈氣療法の一節を抜記して讀者の參考に供することゝした。

靈氣の治療的活能

靈氣の治病的活能について概論すれば、先づ第一に神經及神經中樞の鎮靜である。故に心悸亢進などの患者に放射すれば忽ち鎮靜し、又喜怒哀樂などの情緒の激昂した者に對しても頓に平靜ならしめ、腹部交感神經の興奮たる胃痙攣や吃逆など凡て神經の興奮に基く病患に對して驚くべき奏効を示す。

次に血行促進に對しても大なる力を有し、同時に體內の酸化作用を助けて、血行と同時に體温をも増すのである。(之れ熱の發する所以だ)其他炎症を抑制し、病竈を排除し、尿酸を分解し、醱酵素を活動せしめて新陳代謝の作用を促進し、細胞に活力を與へ、體温を調節し、腫脹細胞を破壊し、結締組織を増殖し、微菌病毒を撲滅する等、其活能は枚擧に遑がないが、之を要するに良能を活潑々地に活動せしむるものと見ればよい。

靈氣能力充實法

吾人は日常呼吸と食物によつて大自然界より靈氣を攝取して居るが、従つて靈氣能力の充實法も亦此の兩者に立脚して居るのである。

一、食養法 食物の點で特に注意すべきは、靈氣は生のものにのみ存するといふことである。自然療法が生食を鼓吹する根本理由も此處に存するのである。生食の出来るものはつとめて生で喰ふやうにし、少しでもエネルギーを多く攝取して戴きたい、野菜の如きでも、グタグタになる迄煮詰めて濃厚な味をつけるより、なるべく、生で――若し生食不可能なら鹽でイタメルとかアツサリゆで、食するやうにし、肉類の如きも可成く淡泊な、新鮮なものを喰ふやうにしたいものである。生のものには、これからズンズン發達してゆく所の活力(即靈氣)が含まれてゐるのである。たとへば一個の鶏卵にしても、これから雛となり親鶏となる所の大なる活力が其の中に藏されて

ゐるのであつて、之れに火力を加へると活力は全々無くなり、只僅に脂肪だの蛋白だのと云ふやうな二三のものより残らなくなるのである。それから何人にも最も手軽に實行能きものは生水の飲用である。湯茶の代りに、つとめて生水を用ゐる習慣をつけていたゞきたい。

二、呼吸法 靈氣を完全に充實せしむる爲には、現在普通人の行つてゐるやうな不完全極まる呼吸法では駄目である。自畫自讚ながら、本會の唱道する靈氣吐納法こそ最も合理的なものと自信する。近來合掌行が此處にも彼處にも流行し、甚だしきは物理學校あたりに於ても、生徒に合掌せしめ、陰陽電氣の交流に依る治病法を傳授しつゝある現状である。しかし何れも淺薄にして理想的と言ひ難い。我が洗心流では、呼吸の調節と、合掌と、觀念力の誘導の三者合一によつて、最も短日に靈氣充實を完全ならしめてゐる。故に病弱者は本法の實習によつて自己體内に靈氣を充實せしむれば諸病自ら癒え、心身快適となり、更に之を外的に放射すれば他人の疾病を治すことを得るのである。

元來本會の靈氣吐納法は、先づ正座法に依つて身を調べ、而して胸式吐納法、丹田式吐納法、觀念式吐納法、強息法、陽氣吸收法の五種を行ふのであるが、此處には、靈氣充實及靈氣放射に最も偉効ある觀念式吐納法のみ講述して、諸君の實習を願ふこととする。

A、觀念式吐納法の原理 觀念式吐納法とは、規則正しき呼吸をなし、その一呼吸と共に一の目的觀念を凝らし、それを潜在意識に植つけて實現を企てんとする方法である。随つて心身の改善に偉大なる効を奏するもので、不肖が幼時九死の大患を一掃したのも實に本法である。

B、觀念法の一例 たとへば觀念式吐納法を健康増進の上に応用するものと假定すれば、靜かに吸息しながら「宇宙に遍滿せる靈氣丹田に集中し、全身各神經に分布され、血管、筋肉、臓器等を刺戟し、其機能旺盛となる」と觀念し、息を吐く時には、

「病弱の原因たる邪氣汚氣は呼吸と共にスツカリ抜け去る」と觀念し、二度三度之を繰返し、かくして十分間以上之を行ふのである。

或は又煩悶解決の上には本法を應用するとすれば「一呼一吸我が頭腦を清涼ならしめ悲哀憤怒の念はスツカリ抜け去りつゝある」といふ具合にやり、中風患者ならば「靈氣丹田に集中し、全身の血液筋肉臓器一切に作用し、枯死せる神經活生し手足はズンズン動き出す」といふ具合に、其他之に準じて行へばよいのである。

所で既に疾病を有する人で實行上根氣の續かぬ場合や、又は觀念法未熟の初心の方には、前記の觀念法は一寸六ケしく、呼吸の速度と合致せぬことがあるかも知れぬ。ソナナ人々のためにモ少し簡單に觀念法をお傳へする。

先づ靈氣が全身に充滿して神經血管臓器等の凡てに作用すると云ふ根本的理解を持ち、愈々着手に際しては、自己の病患部に手を當てながら呼吸をする。手の當て方は手の平をピッタリと患部に當て、指の間を密着することが必要である。そして心身共

にスツカリ力を抜いてボンヤリと構へ、息を吸ふ時に靈氣集中々々々々と二三回づゝ思念し、息を呼く時に「病菌排出」とか「痛苦退散」などの適當の短句を二三回唱へる。抑々觀念法の極意とするところは、理論的に餘り複雑な文句を用ゐたり、精神を無理に集中したりすることは禁物であつて、且つ常に消極的な思念を排して積極的な思念を持つことが大切である。故に前記のやうな、單に靈氣集中とか、治る靈氣集中といふやうな短句を、何回も繰返して觀念することが最も有効なのである。感應の起つた證據として患部に當つた手が非常にアツクなつてくるものである。手は可成く皮膚直接に、胃の悪い人なら胃の上に、頭の悪い人なら頭の上に當てるやうにし、一旦接着した手は途中で離してはならぬ。少くとも一回十分以上はつゞけねばならぬ。かくしてゆけば自己治病ぐらゐは極めて容易である。

C、靈術の究極點 これ位のことでは疾病が治るものと疑はる方があるかも知れぬが、尠くとも靈氣の作用と觀念の偉力と、呼吸法の効果とを理解された方には何の不

思議もないことと思ふ。鱗の頭も信心からと云ふ如く、靈術の極意も結極念の一字に盡きるのである。確信なくして十回行ふよりも確信のもとに断行する一回の方が遙かに勝つてゐる。靈氣吐納法の如きも、單に血液の循環が良くなるとか、神經が刺戟されるとかいふやうな生理一偏の觀察に止まらず、心身相關の理により、調身は即ち心理上の作能を完からしめ、かくして洗心淨體以て吾人本具の靈能を發揮せんとこの心掛けこそ望ましいのである。

D、靈氣能力を充實する法 さていよいよ本論に立返り、觀念式吐納法を應用して他人治療の基本となる靈氣能力を充實する方法を説明しやう。

先づ正座法によつて姿勢を整へ、閉目し、靜かに胸先きに於て合掌する。合掌の法は、神拜の時のやうにすればよろしく、指の間をあけないやうに密着し、手首や臂や肩に不自然な力を入れないやうにユツクリと構へる。

次に鼻から吸息しながら、「大宇宙の靈氣、我が手掌を介して丹田に（臍下丹田のこ

と）集注する」と觀念し、且つ觀念すると共に靈氣が手掌からズウツと這入つて丹田に集中する状態を觀想するのである。

次に鼻から息を吐き出しながら「丹田に集注せる靈氣は我が指頭から猛烈に放射すると觀念する。

而して呼吸、吸息を繰返すと共に觀念をも繰返す。若し觀念法未熟にして此の念想文が長きに過ぎると思ふ時は、息を吸ふ時に「靈氣充實々々々」と觀念し、息を吐く時に「靈氣放射々々々」と觀念する、鼻から呼吸をするのであるが、實はこれ指頭から靈氣が出入してゐるのであるとの觀念に移さねばならぬ。

一回の實習を約二十分間とし、修行後はよく兩手を摩擦し、更によく兩手を振るがよい。スルト兩手はデン／＼して來るものである。

觀念式吐納法に於ける息の出入法は、鼻より息を徐々に吸込みながら、臍下丹田、（臍の下方約一寸五分の處）を八分目程度まで膨脹し力を入れる。次に息を止むること

なく直に、再び鼻より息を吐きながら丹田部の力を抜きや、凹ますものとす。決して不自然に力を入れてウム／＼と力むべからず。呼吸吸息共八分目程度とす。故に病弱者も容易に實行し得。

實行の場合は必ずしも正座とは限らず、椅子又は仰臥の姿勢にて實行するも差支かへなし。

E、靈氣能力試験法 さて右のやうにして兩三回も修業するうちにポツ／＼靈氣の放射を指頭に自覺するやうになる。

我が洗心會道場では漸次左の實驗を試みて靈氣の放射を確認し、又その強弱を知る一法としてゐる。

(イ) 合掌の指先がムヅ／＼してくること。

(ロ) 手掌が熱くなり特に指端が非常に熱くなつてトツク／＼と脈がうつてくること、

(ハ) 指頭から一種の涼しい風が出る様に感ずる。

(ニ) 暗室内に於て旺に觀念式吐納法を修すれば指頭に微光を認め得ること。

(ホ) 他人の手掌、顔面等に、指頭を差向けるとやはり自己の場合同様、先方は涼風感を訴へるものである。兩者の間をフツンの如きものを以て隔てゝも、それ等の隔障物を透して立派に感應する。

(ヘ) 更に遠隔放送として、一人の者を隣室に直立せしめて襖を閉ぢ、術者は相手の顔とか手とか一部分を思念しつゝその部分へ指頭をかざすか、又はプウ／＼と吹息を與ふれば、先方は必ずその部分に一種異様の感覺を起す。無論、其部分は相手には一切告げてをかぬから、全々暗示作用ではない。此の靈氣の遠隔感應性を利用すれば遠隔療法も易々たるもので、世上二三の大家連が遠隔療法を指して、單なる推感作用であるかの如く説くのは、その人に圓熟せる靈能が無いからである。

(ト) 一人の相手を直立せしめ、虚心平氣に住するやう命じ、さて術者は其の前に立ち手掌から靈氣を放射しつゝ、相手の眉毛又は咽喉部の何れかに指端をかざし頻りに兩手を引く動作を繰返せば、相手は次第々々に吸引せられて遂に前倒するに至る。反對に押す動作を繰返せば相手は遂に後倒する。決して暗示作用でないことは、一室、二室を隔てた者に何等の豫告をせずしても感應する。

(チ) 試みに病患部へ手を當てゝみると、手掌に非常な高熱を發し、患者に非常な好感を與へるものであり、頭へ接手したのみで、足の先まで電氣が通ふやうに感じたり、自然運動を起してくる者などがある。何といつても病氣がズン／＼治つてくるのが第一の感應である。

(リ) 獨り人間に對してのみでなく、鳥や犬猫などに對して立派に治病的能力を有してゐる。

(ヌ) 更に花の如きに對しても、靈氣を放射した花は必ず二三日早く開き、又既に

枯死せる花を活生せしむる。

(ル) 水、煙、等に強く放射する時は微に變化を起す。

(オ) 杉、檜等の薄き板(所謂靈子板)に手をかざせば前進する。

(ワ) 角砂糖に數日間靈氣を強く放射すれば褐色を呈する。

(カ) 酒のかゝつた衣服に靈氣を放射すればシユミを來さない。

(ヨ) 蓄音機の針を包んである紙の一片を掌上にのせ靈氣放射を觀念すると動く。靈氣力の極めて強い人がやると紙は旺にダンスをやる。

靈氣放射法 (治療法)

諸君が觀念式吐納法によつて養成せられたる靈氣能力を如何にして放射するかについて本會に二つの方法がある。曰く唸傳法(眼力、吹息、發聲による傳達法)曰く手傳法の二法である。本書では手掌の放熱法を説くのが主眼であるから、手傳法のみを

お傳へすることにしよう。

手傳法では先づ放射せんとする手を數回固く握つて開き、更に兩手掌を強く摩擦し更に手首の力を抜いて手の先を旺に振る。これで發電法はすんだのである。

次に患者を、それ〴〵病氣に應じて、仰臥なり椅子なり都合のよい姿勢をとらせる長時間の施術にも決して苦痛を感せぬやう樂な姿勢をとらせることが必要である。

術者も患者に充分近寄り、威容を正して按手する。遠方から無理に手を延してゐると、身體や腕が疲勞して放射力をにぶらす虞がある。

靈氣は隔隙物や距離の如何を問はず感應するものであるが、治療の際はなるべく患者を薄着にし按手するか、又差支なき部分ならば皮膚直接に按手することが最も有効である。

次に手のあて方があるが、之れは患部の都合に依つて異なるものである。患部が眼だとか耳だとかいふやうな小さい時には指先一二本を使用し（主として食指と中指を使

用す）頭だとか腹だとかいふやうな大きな患部に對しては手掌全面をあてるのである（其場合指間は必ず密着すること、手は軽く當てること）更に患部が特別大きな場合や病氣がアチラにもコチラにも澤山ある場合には徐々に手掌を移動してゆく。此場合鳥が餌を拾ふかの如くコツ／＼離してゐては駄目で、一旦按手したからには數分間は、（最低限度二分間）手を離さずに充分放射せねば感應は起らない。

患部に按手した後は、治病思念を凝すか、又は靜かに丹田式吐納法（軽い腹式呼吸）でも繰返して居ればよい。

按手後寸時すると、患部に接着してゐる手が次第に暖かくなり、遂には燒ゴテの如く熱くなり、患部は極めて好感を催してくるものである。そして患部の變化が術者の手に色々と感じてくる。之が靈感である。

尙患部によつてはピク／＼チン／＼と蟻走感覺を起したり、涼風が出る如く感じた

全に行はれつゝある證據であるから、ズン／＼奏効してくるものと見て間違ひない不治の病は此の感應が起らぬことがある。

次は手を當てる部分である。これは患者の悪いといふ處、苦痛を訴へる場所に放射すればよいのである。よし按手の場所が間違つてゐても、靈氣は病患部へ吸集される性質があるから（病患部は靈氣が缺乏せるため）チャンと巧みに移送され治療の目的を達し得るのである。

尙眼や耳などの治療は、その患部に充分靈氣を放射すると共に、併せて頭部へも放射する必要がある。胸腹部の病は、前面から放射すると共に併せて背面からも放射すれば、効果一段と的確である。

松原皎月氏著「靈術大講座」は第一卷より第九卷まであり、全九卷一時申込は會費金廿五圓、分冊申込みは各卷三圓である。ハガキで兵庫縣姫路市龍野町洗心會本部宛

に申込みば詳細なる案内書を送呈せらるゝ筈である。

實地教傳……………五日間……………會費金五拾圓也

會場……………姫路市龍野町洗心會道場

一一、病元全療術

曾て精神界社主催の懸賞募集に係る全國精神界人物評傳第三位に當選した斯界の雄である。病元全療院長澤進幸氏獨創の無藥療法であつて、その内容は一種の觀念法に獨特の呼吸法及び觸手療法を加味綜合したものである。此の療法は、他の諸療術に比して比較的簡易であるが、殊にその一法たる正息練丹精神統一法の如きは、最も簡單であつて老幼男女を問はず、誰にも容易に實修し得る絶好な健康法である。

澤田氏著「神經衰弱治療術若返性能旺盛法と保健長生の秘訣」より、茲に其の眞髓を拔萃して初心者研究の資料としたのである。

腹力の充實は健康の泉

心身の健全を保持するには、絶へず積極的に精神を活動せしめる事を忘れてはなら

ぬ。蓋し人間の利己心は其の根柢に挑他的の素因を含有し居るが故に、必然不満の感覺が起つて来る、此れを苦痛と稱し、罪惡の具體化されたものと爲す。故に利己的慾望の強き人程、罪惡の素因が多く苦痛も亦甚しく感ずる道理である。又其の慾望には恐怖の觀念が伴ふ。是れ即ち人類の疾病の原因である。尙ほ利己心の強き人は、常に心の不安が絶えない。此の不安觀念こそ、吾人の生活を暗黒ならしめ、且つ活力を鈍くし、病患の起因を作るものである。人間は四百四病の容器なり等と考ふるは根本より大間違ひも甚しい。人類は元來健康であるから、病の肉體より起るものは極めて尠く、多くは心の苦痛より發するのである。以て精神作用の患者に與ふる影響如何に大なるかを知るべし。實に心意は八萬四千の無明煩惱の巢窟にして、亦四百四病の湧き出づる淵源であるが故に、心意の奥底の掃除を懈る者は生涯病の流れを清むる事は出來ないのである。

若し保健長壽の要道を生理學的に言へば、滋養物等を適宜攝取常用して、自然の營

養素を發生し、以て身體の健全を保持すべきであらうか、本來人間の一生は變化が多
 いから、苦樂に臨み燥がす動かす、泰然として其の進退を誤まらず、性を顧み理を重
 んじ、唯々一時の情慾の赴く儘に心身を使役せず、身體と精神とを充分鐵石の如く練
 磨し、以て心身内外の敵や魔に打ち勝たねばならぬ。其れには先づ腹力を養はねばな
 らぬ。腹力は人間精力の根源にして、總ての働き、總ての力も皆腹力に依つて左右せ
 られて居る。是れこそ眞に保健長壽の祕訣である。想ふべし、世の諸業、百藝、心身
 保健一として腹力を充實せずして超凡脱俗を發揮し得るもの無きを。
 殊に靈的作用を起し、物我一如の境域に至るには、一層精力が絶倫でなくてはなら
 ぬ。而も絶倫なる精力は充實した腹力の所有者でなければ得られない。腹部は眞に精
 力の中心で、腹部に力が充實して居れば、精力は自ら旺盛となるのみならず、吾人總
 ての動作も思想も技藝も記憶力も征服力も親和力も剛膽力も、その他一切精力の強弱
 に關係あるものは、腹力の充實如何によつて左右されることを知るのである。

而して腹力の所在するところは「臍輪」即ち氣海丹田にして、此の全身精力の中心
 たる場所に常に精力を蓄積して居たならば、自然に細胞は活動し、血精は増殖し、血
 液は正しく循環し、以て心身の調和、靈力の發揮により、煩悶を解決し、貧乏を驅逐
 し、病魔を絶滅し、以つて常に健康に、常に幸福に、かくて圓滿なる長壽の生涯を過
 し得ること毫も疑ひを差し狭む餘地ないのである。

靈性の顯現發揮

吾々人類の意識の奥底には靈力が存在して居る。靈力とは即ち心靈の作用にして、
 甚だ偉大なれ共、薄志弱行の輩は常に之れを隠蔽して、其の威力を顯現する事が出来
 ぬのである。不思議なる諸術を行ひ、且つ自他の難症を癒し、惡癖を矯め、境遇を改
 善せんと欲せば何人も必らず靈力發揮の修練を積まねばならぬ。假令へば太陽の光線
 をレンズを以て集むれば、其の焦點には、火を發し物體を燒く力がある如く、吾人

の靈力に働きも、普通は微弱なれ共、修練の功を累ね、其の力を強烈に集むれば、偉大の現象を顯はす事が出来る。試みに思へ、雨天の日は、太陽は少しも大地を照らさぬ。之れ雨氣が太陽の光線を遮断するが故なり。人類の靈力も然り、普通は、三毒等煩惱の暗雲に蔽はれて、少しも光輝を發する能はざりしも、若し克く修練積んで妄想雜念を一掃し、思ひを深くし心を清く、行ひを正しく爲して熱誠に修練を怠らざれば漸次に驚くべき靈的作用を發現する事何の難きことあらん。

吾人は須く心膽を鍛錬し、物理を超越した靈力に因り、非凡の奇象を顯出せしめ得る程度迄、深く研鑽せねばならぬ。谷虚にして、山、自ら對へ、人一心にして、物能く感ず。芭蕉は耳なくして雷を聞き、磁石、心なくして、鐵を轉ず。況んや吾人本具の心靈か開發し、活躍するに至つてをやだ。

靈能發揮法

靈能發揮せば理想的強健上如何なる利益あるや左に簡單に述べん。

精神上に於ては、腦神經を健全にし記憶力を増進する他、思慮周密、判斷正確、意志強固、膽力剛大となり、特に堅實なる徳性と實力とを具ふるに至る。

肉體上に於ては、各内臟諸器官、血液循環系統、腦神經の實質充實並びに其の機能増進、諸筋肉其の他各部の調和された發達。病菌其の他の障害に對する強度の抵抗力増進及び障害に逢ふも回復機能の旺盛等、無病長生の基礎は築かれ、體力は増し、且つ活動性に富み、就中心臟と肺臟とは共に強健となる。又、女子にあつては、妊娠特殊機能も進み、分娩も極めて安全、乳の分泌も豊富となり、誠に無上の理想的強健法と言ふべきである。

正息練丹法

邪氣吐出法 邪氣とは肺胞内を初め體内に充滿して居る炭酸瓦斯や、其他老廢の氣

を總稱して言ふのである。

此の邪氣を吐出する方法としては、胸部を擴張しながら鼻より細く長く、充分に吸氣したならば、此の息を下腹部に送つて全氣力を臍下丹田に充實せしめ、暫時溜息し堪へざるに至つて、口笛を吹く要領にて唇を少し開き緩々と吐息するに隨ひ、上體を前屈して顔を膝頭の邊迄持つて行くのである。其の後心窩を次第に凹縮させ、兩手掌を以て腹部を壓する如くし、全身の老廢物を全部吐出して一回終るのである。此の一回が終つて普通呼吸を一二回程し、又繰返し五六回も行へば、大抵體内の邪氣は吐き盡すものである。尙本法は腹力を充實し、活力を發揮し、腰の力を非常に強くするの大効あり。

氣養精強法

本法の効果は絶大なれ共、一面修術方法も少し複雑な點あり、直接指導に據れば至

つて容易なるも、各自充分の効果を擧げ得る様、議論や理屈は抜いて説明せん。

先づ修行に先き立ち「吾は氣養精強法を行ひ、大宇宙の生氣を吸納し、以て心身共に清淨にし、全身の活元を旺盛ならしめ（病根ある者は直に治癒する様に、その他要求に従つてそれ／＼適當な文句を觀念する）若々しく元氣發洩として、不老長壽の目的は必らず達成せすんば止まぬ」と強く觀念するのである。

總て何事に於ても然りであるが、充分自信を持ち、積極的に邁進する事に依つて、驚くべき大効を奏するものである。是に反して果して病氣が治るであらうかとか無病長生が實現するか等と消極的な弱い觀念を持つことは絶対禁物である。

積極的觀念と消極的觀念——信不信——熱誠と不熱心——熟不熟如何によつて、効果の有無、成否が岐れるのである。本法修行に依つて「我が何々病は必らず快癒し、心身共に強健となり、不老長壽は絶対に出来る、大目的を完全に貫徹せざれば止まぬ」と強烈なる觀念を凝らしてこそ願望は易々と實現達成する事を繰り返して置く。

氣養精強法の目的は延髓脊髄及腰髄に精氣即ち靈氣を蓄積充滿せしめ、以て氣を養ひ精を盛んにするのである。

脊髄とは反射機能及傳導機能を有し、全身大部分の知覺や運動を支配するのみならず、中樞機能としては血管運動、勃起、射精、分娩、發汗、排尿、脱糞等の作用を掌る重要な處である。

延髓も亦重要な處であつて、其の中樞は反射中樞として眼瞼閉鎖、嚥下、咀嚼、嘔吐、唾液分泌、涙液中樞等である。自動中樞としては呼吸、血管運動、心臟調節及鼓舞中樞の如き營養運動化の中樞である。又此等に附屬する神經纖維は舌、唾液腺、咽頭、食道管、胃腸、脾臓、氣管、肺、心臟、諸血管等を主宰する處から見ても、如何に延髓が大切な處であるかは論ずる迄もない。此の後頭の延髓に接近して小腦があるから此處に靈氣を蓄積するは最も有効なのである。

實 修 法

正座するも椅子に寄るも自由とし、目及口を軽く閉結して、舌端を以て唇及口中を三四回廻すと、口中に唾液が湧出する。其の唾液を胃にドクリと飲み下す（是れは非常に營養分に富み其の他の利益あり）と同時に、口を細くして旭日昇天に面し、その光線が——曇天雨天の際は宇宙の生氣が——連綿として吾が胸腹中に吸納さるゝ様な心狀心眼を以て、恰も見ゆるが如き氣持で徐々に吸氣を初める。其の吸氣に依つて臍下丹田を充實（腹壓強高）せしめ、暫時持息して後、其の生氣靈氣が腰髓より逐次脊髄に上昇し、精氣は延髓に止まり蓄積充滿すると信念しつゝ、鼻より靜かに綿にと息を吐き竭して一回終るのである。この際注意して置きたいことは、吸氣に際しては、宇宙の生氣丹田に流入し、靈氣となつて充實す。と觀念し、持息の時は、元氣旺盛にして無病長生は必らず實現す。と觀念し、吐息の時は、丹田の靈氣は脊髄より延髓に止

まり活力増進す。と強く觀念することである。而して此の場合には、肛門を引き締め脱腸や痔疾を防ぎ、尙心窩を凹まして胃擴張等を防がねばならぬ。修術回数は毎朝十回位行へば結構であるが、二三十回宛行へば尙更結構である。

正息練丹精神統一法

正息練丹、精神統一法實修に際し、比較的簡單に心を集注させる法は、無意に呼吸を數へる事に依つて、精神散慢や雜念を防止し、精神統一を容易ならしめることである。左に二三の方法を説示し置く故、各自行ひ易い法を選び随意に實行するのが便利である。

一法 自己の臍又は丹田に精神を集注し、吸息により丹田を充實し、吐息に依つて縮回して時、即ち一呼吸を以て一回とし、二十分、三十分と續け、熱心其の宜しきを得ば、呼吸は次第に静まり、短縮して精神統一は實現し、無我の境に没入する事容易である。

易である。

二法 一呼吸一回として數へ、逐次百に至り、四百、六百と回を重ねるに隨ひ、恍惚として統一状態に没入する事一法と同様なり。

三法 柱時計の振子の音に心を傾け、往復一回として數ふる時は、心は時計の振子に集中し統一は易々たるものである。

以上の方法により心を或一點に寄せ、或は何等意味の無い事を數へる事によつて、一切心の動きが静まり精神統一状態に没入する事は、我々多年實驗研究の結果、眞實に出来る事明白なのである。

觀念息

本法に於ける姿勢は正座によるも、椅子に寄るも何れにても良い。先づ鼻の先一二寸の處で軽く合掌し精神を此の合掌内に集注し、指頭より靈氣の出入する事を觀念し

行ふのであつて、靈氣充實法としても、靈能力發揮法としても、最高の方法である。其の一例を述べれば、吸息の時には宇宙の靈氣指頭より流入し來ると觀念し、溜息の時には、流入したる靈氣丹田に充實すと念想し、呼息の時には靈氣指頭より盛んに放射すと信念す。

扱て之れを修行する時は靈氣非常に充實し、暫くにして合掌面に溫熱感を覺へたり又は蠅や蟻等が指頭を匍ふが如く、ムズク蟻走感覺を起したり、或は指頭より血の迸る様にズキン／＼と感じ、又はスー／＼と風の出入する如く涼味を感じるものである。此れ即ち靈氣の充實したる證據である。尙又合掌は精神統一、至誠、調和の三義を含むのである。而して手掌より靈氣放射するに至れば、他人の顔や掌に三四寸或はより以上の間隔を於て醫す時は、壓力を感せしめ、又指一本を延ばし、他人の目に接近する時は、目は非常に涼快を覺へるのみならず、可なりの眼病をも癒し得る。此の程度に至れば、輕病は朝飯前の事、治療に練熟し、強力なる治病觀念を凝らす時は、

可なりの重患者や、醫藥で治らぬ難病痼疾をも容易に癒り得るのである。

顯動と潜動

端座して合掌した指尖に精神を統一する時は、先づ指先がピリ／＼と微動し初め、次で兩手が上下前後左右に自動し、やがて此の自動運動が全身に及んで、自然と身體が飛動して來る。此れが即ち靈動作用である、此の様に靈動が肉眼で見えるのを顯動と云ひ、肉眼で全く見る事の出來ない微動を潜動と云ふのである。要するに顯動は一つには、初學者の爲めに靈動とは、どんなものであるかを示す爲めであり、一つには潜動に導く手段である。諸病治療には専ら潜動に依らねばならぬ。靈動の起つて居る手を患部に按手する時は、電氣にでも、かゝつてゐる如く、其の振動を感じ、且つ此の振動が細かい爲めに、患部の最深部に迄充分傳はり、神祕的な力によつて、病細胞を破壊し、如何なる難病をも易々治療する事が出來るのである。此れ即ち中腦を経て植

物性神経を刺戟し、其の配下にある不随意筋を微動するが故に、効果偉大且つ的確なのである。此れに反し顯動は振動が粗い爲めに、身體の部まで到達せず表面で消へてしまふ爲めに、治療的效果も極めて尠ない。而して顯動は終腦より動物性神経を刺戟して、随意筋を働かすのである。

以上述べ來つた妙法を實修研究する時は、靈妙不可思議なる大自然の偉力を體得し其の神秘的なる力によつて、病細胞を破壊し、これを健全なる細胞に同化して組織を一新する所の根本療術を會得したと言ふことが出来るのであつて、これは醫學其他の治療の及ばざる最も完全なる療術であると余は確信する。即ち本療法は絶對に副作用や危険を伴はず、肉體的疾患は勿論、内部に潜在するあらゆる諸疾病を一掃し、患者の信不信に論なく、完全に癒し得る最も安全且理想的療法である。

又それを實修すれば、知覺神経、交感神経、運動神経等の活動が平衡となる爲め、心臟脈管の活動旺盛となり、血液の循環を良好にし、身體細胞各臟器、諸機關が本能

的働きを起し、白血球の食菌作用、血清の溶菌作用、抗毒作用が充分と行はれ、新陳代謝の機能が旺盛になり、かくて病疫の根治、無病長壽が實現されるのである。

澤田氏が十數年來實地經驗上の結果を根底として、之れに學術的説明をも加へてある。同氏著「神經衰弱治療術若返性能旺盛と保健長生の秘訣」(金壹圓八拾錢)は直截簡明で、斯術の實習に取りて甚だ有益なる書である。病元全療術の方式に就て、詳細を知らんと欲するものは此書を參考とせらるべし。

講習期間一週間——會費金三十圓也。

會場………東京市淀橋區上落合二丁目七八六番地病元全療院

二、生道靈掌術

二七〇

靈掌術は、生道學會總主大山靈泉氏の發見主唱する一種の觸手療法であつて、「人間天賦の靈能と手掌の技術とによつて自他の疾病を徹底的に根治」するを目的としたものである。元來身心は相關不離のものであり、眞の病氣治療は身心兩面より行ふものでなければ完全なる効果は望めぬに拘らず、所謂無藥療法の多くは、神祕的靈能を標榜するのみで、醫學的科學的には疑問多く、理學的無藥療法の多くは、人間の靈的神祕性を否定して一時的糊塗をなす現狀を慨して大山氏が苦心創始したものであつて、或る場合には理學的療法を主として精神的手段を副とし、又病氣に依つては精神療法を主として理學的手段を副としてゐる。

大山氏に依れば靈掌術の根本原理は「生道」である。生道と言ふのは簡単に説明すれば、宇宙太靈の分身たる人間各個の靈の要求して止まぬ眞、善、美の生活を行ふべ

き道であり、此の生道を自覺して宇宙共同の生活に仲間入りし、共通の生命に生きる事が生道學の目的なのである。

靈掌術は、斯くの如き生道の人生觀に立脚して自他共に靈肉兩方面より改造せんとするのであるが、肉の方面換言すれば手掌の技術的方面に於いては、最新の理學的療法、殊にカイロプラクチックに負ふところが少なくない。併しながら本項に於ては、靈掌術の基礎修養法を紹介するのが目的であるから、直接關係なきカイロプラクチックの理論等は割愛することにした。

扱次に靈掌術の創始者大山靈泉氏著「靈掌術教授全書」中よりその基礎修養法たる修靈療養法、身心統一訓練法、心靈光線發顯法を順を追ふて紹介しよう。

修靈療養法

1 正座調息法 正座とは正しく座すことである。正しく座すとは宇宙の眞理、生道

に適合するやうに座すことである。膝先適度に開き（男子は兩拳の入る程、女子は片拳の入る程）足先を組合せて其上に臀部を置く（足先は稍深く組むのであるが、浅く組む習慣のある人は浅くともよし）

下腹部を少し前に出す如き氣持にて、鳩尾下を落す。脊骨を成るべく真直にし、首は真直にする。胸を屈めぬ様、又あまり張らないやうにして、右手を上にする。

調息とは呼吸を調べることである。呼吸が調ふて始めて心が調ふ。眼を閉ぢ徐々に鼻より吸入れ、口より出す。吸ふ時には下腹が少しふくれるやうな氣持にし、吐く時は反對になる。所謂腹式呼吸である。鳩尾下に力の入らぬことが大切である。

時間及回数、最初は五分間から十分間位行ひ、慣れるに従つて二十分から三十分まで行ひ、呼吸と共に自然に精神が鎮つて來る。

方法、正座して目を閉ぢ、直ちに目的を觀念する。即ち「自我を空うして宇宙太靈に歸依し、大自然の靈力を自己の身心に受け身心を淨化する」ことである。其後です

ぐ調息法を行ふ。

正座調息ともに無理をしてはならぬ。むづかしく考へずに樂な氣持で行ふて漸次に慣れるのがよい。凡て自己の身體、病氣の状態を考へて苦痛でない様にしたらよいのである。胸、下腹等に力を入れてはいけない。氣を落付て自然と力が入つて來るのはよいけど、強て力を入れてはいけない。

私共が五尺の肉體を以て宇宙に通じてゐるのは物質的には呼吸のみである。又呼吸に依つて私共は宇宙の靈氣を吸收し、自然の力を受けることを忘れてはならぬ。吸ふ息は靈氣を腹部から全身に吸收し、吐く息で自己の邪念邪氣を吐く氣持で行ふ。

2 合掌交靈法

正座呼吸法によつて身心が落付いたなら直に交露法に移る。

方法 一、合掌鎮心 (一)目を閉ぢ兩手を肩の通りに真直ぐに前に出して伸し(二)息を吸ひつゝ、頭上に伸し、頭上にて密着して合掌する(三)頭上で合掌せる兩手を靜に胸の前に下らして息を吐き鎮心す。

二、念靈 合掌鎮心して宇宙太靈を心中に念ず。「歸命太靈」「歸命太靈」黙唱すること一分二分三分四分と経過するに従ひ、刻一刻と宇宙の靈氣は身心に集り來りて、兩手掌より腦部、胸部、腹部と次第に満ちく、自己の靈は宇宙の靈と合一せんとして互に感應道交す。

三、靈道 かくして次第に合掌せる兩手は溫度を感じ、左右兩手はビリ／＼と軽い電氣に感應するごとく感じ、次第に前後左右或は上下に動き出し、全身靈動するに到り、心氣活然として靈我一如の妙境に入る。かくして身心共に非常に淨化されて病毒は絶滅される。

3、全身押擦法 交靈作用を行ふて靈氣の發動してゐる手掌を以て全身を氣持のよ様に押へ、擦するのである。

(一)兩手を以て大脳部を押へ、首筋を漸次下にもみ下らす。(二)指先又は手掌を以て顔面を押擦する。特に眉と眉との間の皺を取る様にし、心で廣くする様に思ふ。

(三)兩手を胸にあて横に撫擦する。(四)兩手を肩から指先まで交互に撫擦する。(五)腹部は右から左へ廻す様に圓く撫擦する。(六)脊部から腰部、臀部と撫擦する。(七)兩膝を足先きで押擦する。

修靈療法全般につき注意

時間は全部で十五分乃至三十分位自己の身體相應に行ふのである。

修養の時刻は朝食前と就眠前が一番よろしい。

私は毎朝七時から四十分行ふてゐる。其時實習せられれば感應道交作用で一層有効である。

自己療養法は専ら自我を去つて大自然、太靈に抱かれ助けられる方法である。従つて自然は皆自己の一部分である故に、成るべく自然に接近するやうにせられたい。即ち時々太陽の光線を受けたり、山野の空氣を呼吸したり、草花を眺めて楽しんだり、絶えず自己と自然と生命の根元を同うして交通してゐることを思ひ出すのである。

身心統一訓練法

二七六

一、自己觀念療法 正座して瞑目し、兩手を前に舉げて「左右に開く」といふ觀念をする。左右に開いた「時は次第に閉ぢる」といふ觀念をする。閉ぢた時は又同じ觀念をして二三回手を開閉すると次第に早く開閉して來るやうになると共に、身心は一致して自然に統一して來る。次に「此の手は上に舉る」と觀念すると又次第に上に舉る「兩手は膝の上を下りる」と觀念すれば下つてくる。次に「身體が前後に動揺する」と觀念すれば、身體は次第に動揺して益々心は統一して來る。かくの如く自己で觀念する通りに身體が動いてくるやうになると自然に雜念も滅却して來るから、其の時自己治療の目的を觀念する。其觀念は自己の目的を決定して一定して置くのである。例へば「明朝は六時に起き」「今晚は夢を見ない」「強肺」「健腦」「胃腸健全」等の如きものである。目的觀念は成るべく簡單にして、之を三回程下腹で默唱して其の儘暫時

静座鎮心するのである。

此の觀念療法は最も簡單に睡眠前に應用して、奇効を奏することがある。

二、性相改造法 身心相關、内外一致の理を應用して性相を改造することも出来る。性相の改造は又疾病の治療上頗る有効である。かの骨相家などが相を見て心を見るのも此の原理によるものである。精神が肉體に影響を與へると共に、肉體も精神に影響を與へるものである。

催眠術によく掛つてゐる人間に握り拳をさせ、怒りの姿をさせると、やがて眼を瞑らせ、顔を赤くして、口で怒りの言語を發するのを見受ける。之は肉體の精神に與へる影響を示すものである。従つて吾々は性相を改造することによつて精神を轉換し、運命を開轉し疾病に好結果を齎らす事が出来る。

イ、常にニコ／＼せよ 陰氣にしてゐると、一層精神が卑屈になつて、不愉快となり、悲み易く瞑り易くなる。不愉快、悲哀は共に血液の循環を不良にし、胃腸の働き

を悪くし、呼吸器の作用を微弱にし、神経を萎縮せしめて病氣の治癒を妨げたる。特に怒りは一種の毒素を分泌して、身心に非常な害毒を及ぼすものである。従つて病者も健康者も、常にニコ／＼することを修養することが必要である。

ロ、眉の間の皺を除く 眉の間に縦皺の寄つて、眉と眉との間の著しく接近してゐるのは、心の狭さと、精神の不愉快を示すものである。生れつき眉の狭いのを直ちに廣くは出来ないものであるが、中の皺を除くことによつて、相をよくすることが出来る。之は力めて眉の間を廣くすることを心掛けてゐると、自然に廣くなつて、何時の間にか皺は除かれてくる。一番早道は毎朝顔を洗つて、すぐ鏡に向ひ、眉の間を廣くしたり、ニコ／＼することを二三分間も實行することである。

ハ、強固な信念を持つること あらゆる不平不満や怒り、不愉快は宇宙生命と自己の間に隔を造つてゐるからである。我執を去つて宇宙共通の生命に仲間入りして自然と共に生きれば、此の肉體の儘宇宙大生命と交通することが出来る。肉體は海綿であ

つて、靈は海水である。肉體は五尺の生命に過ぎないのであるが、靈は海綿の水が大海に通じてゐる如く宇宙に通じてゐる。宇宙生命の眞髓を直覺した時、我々は無限の生命を證得するのである。人間ばかり相手にせず、大宇宙を對照にするのである。而して朝夕修養の後で觀念するは勿論、常の如き事を觀念するのである。

我生命は悠久無限である。

我精神は圓融無碍である。

我身體は無病健全である。

即ち斯く強固な信念を以て常にニコ／＼し、眉の間に皺をよせないやうにして、生道の修養をしてゐると、自然に性相共に改善されるのである。人間の肉體は毎日新陳代謝をしてゐて、三年たてば上から底まで一新するのである。此の細胞に常に一定の觀念によつて命令してゐると意の如く改善されるのである。

三、身心一致瞬間鍛練法 一、仰臥して手足を充分に擴げ伸して所謂大の字になる

(此時自己は大宇宙と一體であるが如き大きな氣持になる)

二、兩足を閉ぢ、兩手を兩膝のところまで伸して付ける。

三、手の先、足の先に力を入れ、肩を下げ充分に緊張させて肩と踵で身體を支ふる

が如き氣持になる。(この間約三十秒)(宇宙の靈力我身體に集り我は無病健全也と觀念する)

四、突然力を抜き身體を柔軟にすると同時に、精神力もゆるめて何も思はない、(此

間約三十秒)

此の方法を就眠前、起床の際、疲勞した時、腰を使つた時氣の屈した時行ふと身體を整へ、身體の張力と彈力を強くし、疲勞を恢復すること實に妙である。特に推骨の不全脱臼を矯正することが出来る。

心靈光線發顯及實驗法

心靈光線は生命ある人間は皆發射してゐるのであるが、人は之を自覺しないのと、其力が微弱なる故活用することが出来ないのがあります。今此處に私が多年苦心して得たところの方法を漸次述べることに致します。此法を熱心に行ふことによつて、讀者諸氏の運命は益々開展され、健康は益々増進し、人格は次第に完成されて行きます

心靈光線發顯基礎修養法 外部に心靈光線を放射するには、先づ身體の内部を充實し、自ら健康體となること、精神を安定することが第一である。其がためには修養療法と身心統一訓練法の修養を朝夕行ふことである。即ち生道術修養法は、生道の修養となり、自己療養となるのみならず、心靈光線を發顯放射する基礎的修養法となり、自己と宇宙大自然とが一層密接に融合し、靈能開發の第一歩となるから最も必須のものである。

心靈光線直接發顯法(全身振動法) 一、下肢の振動法 直立して兩手を左右に水平に舉げ、左足を六七寸前に出して舉げ、これを自分の力で成るべく早く、こまかく振

動さすのである。あたかも足に水のついてゐるのを早く振り拂ふやうなことを繰り返すのである。左足を振動したなら、同じ調子で右足を振動する。

二、上肢の振動 直立して両手掌に動力を加へ、之を前後左右上下に自由自在に成るべく早くこまかく振動する。前の如く水のついたのを速にふるひ落すやうにする。

全身振動法の奇効 此の全身振動法は心靈力心靈光線の發顯法となるのみならず、保健上頗る有効である。特に隨時隨所で無造作に瞬間に行ふことが出来るので一分間強健法としても興味ある方法である。

一、老衰を防ぐ 身體の老衰は血液の循環しがたい抹梢部から起きてきて、一番抹梢神経の働きの悪くなる。然るに此法を朝夕行へば、抹梢神経を刺戟して其の働きをよびおこし、老衰を防ぐ。

二、脂肪肥満を除く 脂肪肥満即ちぶよぶよの太りすぎは、細胞の破壊と構成の二作用が調和を失し、新陳代謝が不良となるに原因する。此の振動法によつて破壊

作用を旺盛にし、新陳代謝をよくし、肥満を防ぎ、すでに肥満してゐる者は筋肉がしまつてくる。

三、血液の循環をよくする 疾病の生理的原因としては、血液循環の不良は重大なことであるのは人のよく口にするところである。特に血液は内臓部に停滞して抹梢部に少くなるに従つて、血液循環の悪い人は手足が冷える。然るに此法を行ふと内臓にたまつてゐる血液は手足の先に流れ来て、全身の循環がよくなる。一回行つても顔色がよくなり、手足が暖くなるのを見ても、効顯の偉大なのがわかる。

四、疲労がとれ肩の凝がとれる 疲労は身心過勞のため一種の疲労素が身體の内に出て来るからである。肩の凝は悪血の停滞と神経の働がにぶくなるからである。此の法を行ふ時は疲労素を體外に放散し、神経の働をよくし、疲労や肩の凝は早く除かれる。

五、運動不足を補ふ 運動の必要であることはいふまでも無いが、病人は運動と

いふ程のものも出来ず、多忙の人、頭腦を使ふ人、美衣美食の人、運動不足になり易い。此の法は室内と室外とを問はず、相手なしに順序なしに、自由自在に出来るから、運動不足を補ふには大變よいのである。

六、心氣を一轉す ものごとにあいた時、疲勞した時、氣のすゝまぬ時など行ふと、心身相關の理で心機を一轉するのに有効である。

かく保健上すこぶる有効であるのみならず、一面心靈光線の發顯法となるので興味ある方法である。

心靈光線の實驗法 此法は心靈光線の放射を自覺し且つ實驗する方法である。靈的

實在を感覺的に實驗することは頗る困難なことであるが、心靈光線は物質と靈との中間法のエーテル的のものである故に、或程度の精神状態で自覺實驗することが出来る。此の法は私の實に苦心したところのものである。

手掌顫動及溫熱實驗法 全身發動法を修行して直ちに兩手掌を密接し、手掌に靜か

に注意を凝集すると、手掌の間が交靈法の實習の時以上にピリ／＼と顫動して、一種の靈妙な感じを直覺し、次第に溫熱を感ずるであらう。

ピリ／＼と顫動するのは細胞の靈動につれて心靈光線を放射し、左右の兩手掌は陰陽二氣性を現して感應し合ふからである。溫熱を感ずるのは心靈光線の放射と共に一種の電熱を伴ふためである。此の手掌を他人の身體の一箇處に數分間置くときは氣持のよい溫熱を與ふるものである。

牽引力の實驗法 前と同じく全身振動法を修行し直ちに兩手を合掌する。合掌してある兩手掌に注意を凝集しながら兩手掌を極めて徐々に、一尺四五寸まで開く。此時兩手掌は互に感應し合ひ少し離れ難い感じがある。

次に兩手をくだりに徐々にもとの合掌に閉ぢる。此時兩手掌は吸引されるが如く自然的に閉ぢてくる。開く時と閉ぢる時の速力を比較して見ると、閉ぢる時が早く開く時は軽い抵抗を感ずる。是は兩手掌が陰陽二氣を現し、互に異つた心靈光線を放射す

る故に、相牽引し合ふからである。

心霊光線に牽引力のあることは疾病の治療に最も重大な關係を持つものであるから特に注意して戴きたい。

心霊光線 手掌 感觸法 全身發動法を修行した後、心を静め右手を平にして密着し中指の先に心力を集注し、左手掌に向つて五六分離れ、中指の先で徐々に、圓形をかく様にする。此時左手掌に注意を凝集してゐると、右手の指先に應じてあだかも針先で軽くつく如く、冷風の吹くが如く、圓形を感ずることが出来る。

視覺心霊光線の實驗法 昔から眼光などと言はれてゐるのによりても、視覺からは可成り強い光線の放射するものである。心身を統一して一定の場所を凝視する時、其の視線のとゞく所に強い心霊光線を集注するものである。これは自分の身體に實驗することは困難であるが、他人の身體に實驗することが出来る。

何等の豫期精神なく、眠つてゐる人間に向つて、其皮膚の一點を凝視するときは、

其の表面がピク／＼とかすかに動く。尙一層凝視する時は益々明らかに動く。手足などを凝視すると必ず動くし、又眠つてゐるまぶたを凝視するとばちばちと知らずに動かすものである。雑念の少い子供などは一層よく感ずるものである。

心霊光線動物實驗法 動物に感應することを實驗するには家内で行ふことの容易な猫に行ふがよい。眠つてゐる猫の後から耳を一心に凝視してゐると、凝視される方の耳を動かす。又正面より閉ぢてゐる目を凝視するとバチ／＼動す、次第に強く凝視してゐると眠りを醒し、或は飛び上ることがある。

心霊光線の物體を通過する實驗 硝子障子の外にゐる猫を、硝子障子の内から凝視する時は、前の場合と同じく感應する。只肝要は術者の心に隔てをつくらぬことである。障子が一枚あるといふ心の隔りがあると感ずるが悪くなる。

心霊光線による精神感通の實驗 精神の感通することは既に述べたところであつて、一個の生命體である宇宙に於て精神の感通することは靈と靈との感應であつて、

何等不思議のないところである。併し人間の精神の力を五尺の肉體の内に限つて其の神秘性を認めぬ現代科學は、之を認めないのであるが、我々生道修行者は、心靈光線の力に依つて容易に實驗することが出来る。其の實驗法の例を左に示す。

其の一 被術者を一人術者より五六尺乃至二三間離れて瞑目して立たせて、術者は丹田に心を落ちつけ、被術者の後に立ちて其の後頭部を凝視し、後に引くことを強く思念して上體を後に引く時は指一本もあてず、一言も發せずして被術者の體を後に引くことが出来る。

次第に強く思念して益々これを繰返すと、被術者は漸次後に一歩づゝ引かれてくるよしや一歩づゝよつてこないでも、其身體の動くのを見て術者の心靈光線の感應してゐるのを知ることが出来る。

其の二 被術者に向ふむきに瞑目して立たせて兩手を左右に水平にあげさせる。術者は五六尺一方を強く凝視して下ることを思念するときは、思念せられた手の方が段々

々と下つてくる。

其の他段々と修養をつむに従つて、色々のことを工夫して實驗すると、随分靈妙なことまで出来る。これは心靈光線の牽引力と相互の精神の感通作用によるものである

以上は大山靈泉氏著「靈掌術教授全書」(非賣品)より抜萃したのであるが、本療法
の臨床的方面に關しては同書に詳細説明しあれども、元來會員組織の教科書ではある
が、之を得るには何んとか便宜の方法もあらう。

講習期間……………一週間……………會費金三拾圓也。

會場……………廣島市國泰寺町(縣教育會館前)生道學會本部

……………神戸市外荻屋(阪急驛一丁東北)生道學會普及本部

二三、森式觸手療法

觸手療法は東京心靈學協會長 森美文氏の多年苦心の結果創始された森式治療法である。森氏は元來法曹家であつたが、性來の宗教的熱情は事毎に法律といふ非人間的、非宗教的範疇を排斥し、遂に法曹家たるを辭めて、觸手療法を以て廣く世人を救ふべく決心されたのである。彼の大正十二年九月の關東大震災火災に際しては、東京全市を隈なく馳せ廻つて、傷者、病者の救治に寧日なかつたことは有名な逸話である。氏は斯くの如く宗教的大乘的信念で固められた眞面目な押しも押されぬ療術家である故に、その觸手療法に於ても多分に宗教的色調を帯びて居る。「治療則祈禱」「信則應」は氏のモットーであり、その治療法の基礎たる合掌を「神佛禮拜の儀式であり、神人交通の儀式」としてゐるのも畢竟宗教心の現はれに他ならない。

次に氏の著書「觸手療法の理論と實際」其他に據つて觸手療法の全貌を紹介しよう

祈禱と觸手療法

勞働即祈禱、尊い言葉である。

勞働即祈禱の信念の下に孜孜として働き得る者は幸である。これこそほんとうに神を識る者の此の世に於ける生き方である。

宇宙目的と人生目的とが一つに合する所、我が仕事は即ち神のわざであると。賀川豊彦氏は言つた。

私は過去に於て治療即藝術と叫んだ。治療即藝術として認識する時なるほど他の模倣勞働よりも尊いものではある、が然しまだほんとうのものではなかつた。もう一步深く突き進んだ治療即祈禱でなければならぬのだ。即ち私達の治療行爲、それは宇宙目的と人生目的とが統一されたものでなければならぬ。それ故に各種の操作技術等は單なる模倣に終つてはならぬ。勞働の尊嚴は單なる模倣の世界には見出されず、

自由な創作的勞作に於てのみ保たれるものであるからである。

或る人は、治療に際しては「祈り」の心を持ってと言れたが、まだスキがある、治療即祈禱だ、治療そのものが祈りでなければならぬ筈だ。

曾つて醫學博士暉峻義等氏は、醫學は自然科學に基礎を持つと同時に、他方一種の精神科學に基くものである、治療學は科學であると同時に、藝術である。それ故に醫師に於ては知性に關する教養が大切であると同時に、感情も意志も、否人格的教養もまた醫師たるの要件である。と喝破された。云ふ意味の藝術とは、宇宙意志を表現する唯一の宇宙藝術であり、生命藝術でなければならぬ。それなればこそ治療は究極宗教と一致するものである。獨り治療行爲のみならず一般の勞働そのものが然るのであつて其處に「勞働は神聖なり」の意義があり、而して又た「醫は仁術なり」と云はるゝ所以である。

恚うした意味に於ける治療法を現代の治療界に求むる時、そこに私は觸手療法の名

の下に行はれつゝある一種の治療法のあるのを喜ぶ。

觸手療法！ そは人間本具の治病能力を合掌修業によつて一層強力ならしめ、之を他の療病に應用する方法であつて、他の多くの治療法の如く技術を要しない。それ故萬人何人にも可能である。たゞ合掌修業を要するのみ。合掌！ これこそは神佛禮拜の儀式であり、神人交通(感合)の儀式である。我々が神佛に祈りを捧る時、兩の手掌は自らその掌を合する。我々は又た身に傷痕をうけ或は疾病に苦しむ時自ら手掌をその患部に當て合掌の形式をとる。たゞ多くの人は此の場合祈禱を忘れ懺悔淨化の心を起さぬ。それ故に、「藥より手當て」の効が顯はれぬ。敢えて私が「治療即祈禱」と叫ぶ所以は茲にある。されば合掌によつて自他の病疾を癒さんとするならば、患部に手掌を當て(是れ一つの合掌である)ひたすらに神の愛を信じ自己を懺悔淨化し疾病の治癒に向つて熱禱すべきである。斯くすることによつて「信則應」の理が行はれるものと私は堅く信じて疑はない。

實にキリストの言はれた如く、「爾の信仰爾を癒せり」である。友よ！だゞ信せよ而して信じて是を實行せよ。たゞに信じて苦惱ある所に手を當てよ。その時君は君の手が何時しか熱かき神の愛の手に置き代へられて居るのに驚くであらう。そして感謝を禁じ得ないであらう。

觸手療法の治療及び診断

觸手能力の誘導法の實修によつて、果して自分の手掌から放射線が出てゐるかどうかを知る方法、それは至極簡單です。先づ瞑目します。そして左の手を僅かに前方に出します。今度は右の手の指頭を左の手掌に直角に向けます。距離は二三寸位、こうしてゐると左の手掌面に、丁度涼しい風が靜かに吹いて居る様な一種の感じを覺える筈です。又時によるともつと強く、ビクビクとする様な應じや、痛がゆいやうな感じを覺えます。若しこうした試験法でハッキリと感じが判らぬやうなれば、左の手掌に

右の手掌を向き合はせます(距離は二三寸)。そして右の手をスーツと引いて見るのです。そうすると前に言つた感じが、一層ハッキリと判ります。此の方法では右の手を遠くへ引く時に、涼風の吹く感じが有り、近づけるに随つて温い感じがします。これは決して手の運動による空氣の振動を感ずるのではなく、又手のぬくもりを感ずるのでもありません。強くなれば直立してゐる人の後頭部に手掌を向けて、強く後ろに引く動作を繰り返すことに依つて、後方に倒すことさへ出来る位であります。

さて此の試験法を行つて、相當放射線が放射してゐることが判りましたら、愈々治療に取りかゝるのであります。

病患部の判明してゐる場合には、夫々その患部に手掌を當てます。それは成る可く皮膚に直接に觸れさせたいのですが、着衣の上からでも差支はありません。この場合必ず一種の感じを手掌に覺えます。ビク／＼と強い脈の様な、或はチク／＼刺す様な、その他色々な感じを覺えます。そして、此の感じは病氣の輕重に正比例する様で

す。此の理由は生物電氣の理論から考へると直ぐ肯かれます。

そして治療の回数が重なり、病氣がよくなるにつれて、此の感じは次第に薄らいで行きます。そして長時間手を接觸してゐても、更に何等の感じも起らぬ様になつた時は、則ち病氣の治癒した時であります。ですから熟練すると疾患の部位程度等の診断が容易に出來得るやうになります、が初心の中は病名の確定した、疾患部の不明でないものから、治療にかゝられることをお勧めします。

以下治療の順序を申し述べませう。

先づ患者に適宜の臥位をとらせませう。そして瞑目させませう。これは患者の精神の沈靜を計るのが目的です。それから術者は患者の前額部に手掌を軽く當て、「どうぞ此の方の病氣が治りますやうに」と専心に思念することです。之れは非常に大切なことで、此の思念に依つて治療効果は著しく促進されます。彼の十六世紀のスキスの解剖學者バラセルススが「類似の者は類似のものを治す」と喝破した此の教義に則つて、

創案した處のチャールス、エツチ、ダンカン博士の自動療法(オートセラピー)や、フリードリツヒ、ハーネマン氏の類似療法の標語としてゐる「類は類を治す」と云ふ精神療法も、結局は患者に對し深い同情と理解を持ちて臨み、治療に際しては、此の病者は必らず治せる」と思ひ、患者は術者に對し深い信頼の念があつて「此の人ならば治して貰へる」と思ふ處に感應道交がある。即ち西勝造氏の所謂心境の一致がある譯で、かくしてこそ初めて治療に効を奏するのであります。されば「手のひら療治」の人々も此の點を非常に強調されてゐますし、平田内藏吉氏も心療法の方で「祈り」と云ふことを説いてゐられます。即ち

△施術者は次の如くに祈りて治療を始め、終つて感謝するがよからう。

神よ

心療はあなたが此世を天國となさん爲めに與へ給へる尊き療法であり、私をその爲めの使者となし給へるを感謝します。願はくば之れを正しく親切に行つて、同胞を

喜ばし、あなたの榮光を彰はさしめ給へ。そこに居る兄弟(姉妹)をして、心療の恵みを感じてよりよき生涯を送るに至らせ給へ。

△被術者の祈り

神様

願はくば、わが罪をゆるして健康を興へ給へ。健康は光、力、希望、歡喜、感謝であります。その健康と比べますなら、何の苦痛が耐へられないことがありませう。健康の爲めにとあなたが御へ下された心療——この心療を受くることを心から感謝いたします。

被術者が治療中念々此の祈りを絶たぬなら、刺戟は快感に變じ、効果また顯著に現はれるでせう。と

鹽谷博士も「療治中は専心になる事が大切である。話しをしながらや、他の事を考へながらでは、効果は薄い。この病氣が是非治るやうに」と専心に念ずる時に、効果

は著しく大となる。患部に當てゝゐる手をとほして、自分の全力を相手に打ち込むと云ふ意氣込みでやるのがよい。と言はれてゐます。

要するに治療者たるものは、人生に對しより敬虔なそしてより謙讓であり、個々の病者に對しては深い同情と理解とを持つて接し、治療に際しては治癒に對して確乎たる信念を持つてかゝられることが必要であります。

思念が濟みましたら直ぐに患部に手掌を當てます。然し此の際に決して押壓してはなりません。觸手、接手或は按手の名稱の因つて起る如く、軽く患部に接觸せしむるのであります。そうして治療を開始しますと、炎症性の疾患や火傷切り傷等は、一寸の間却つて疼み出すことが多いのです(火傷などは其の爲め成る可く手掌を觸れずに患部に接近して手掌をかざす位にしてゐていゝ位です)即ち手を當て、二三分すると今迄何の苦痛もなかつたものが、痛み出して來るやうな事があります。併しそれは數分で消失して、その後は頓に輕快した様に感ずるものです。否な實際に輕快するので

す。尙ほ治療中患者は往々にして快い眠りに陥ります。が決して覺醒させる要はありませんから、そのまゝ治療を繼續してよいのです。

又慢性の疾患は——二三回治療した後、症状が増悪することも多いのですが、之れは反應であつて一日乃至數日の後には消失します。此の反應が早く現はれる人は、治療が一層早いやうです。ですから患者には、豫めこの反應の來ることは、知らせて置くことが必要です。

治療の所要時間は大凡二〇——三〇分でいゝやうです。然し初心の中は努めて長時間の觸手を必要とします。それはまだ放射能が弱いからで、熟練の結果相當強力になりましたら、二十分位でも結構ですし、猶それ以下に短縮されます。

手を當てるには右手掌は直接疾患部に、左手掌は他の部に當てます。そうしますと生物電氣の關係から言ひまして、右手掌には一(陰電位)が高まり、左手掌には十(陽電位)が起り、單に片手を使用するよりも一層効果的であります。手のひら療治の方

では、右手…のみ重に使用し、特殊の場合でなければ右左同時に使用しませんが、之れは少し考へものだと思ひます。

診断などをする場合は、特に兩手を使用した方がいゝ様です。平田氏は觸手診断の理論として

心療の診断を更に丁寧に行ふ時用ひる觸手診断法は、生物電氣等の示す處によりまして、先づ皮膚にあらはれた電位の變化を觸手によつて探る法であります。即ち私等の右方の手を患者の他のある部分に置きまして、右手に注意を集中しまして、右手の觸覺を興奮させます。すると右手手掌は電氣的に一となり、右手…は反對に電氣的に十となります。それ故、右手手掌が患部の身體の病氣の反應として、電氣的に十となつてゐるところに當れば生物電氣的感應作用が起り、引きつけられるやうな感じがします。同時に暫くするとその感が去り、電位の變化が幾分調節され、患者の氣分が爽快になつて……云々

次に診断法の二三を紹介して置きましょう。

頭部と背部の診断の場合

- (一) 右手を頭部に左手を背部に置きます。(注意は凡て右手に置くこと以下同じ)
 (二) 左手を頭部に右手を背部に置きます。頭部に故障のある場合は(一)のとき、背部に疾病があれば(二)のとき、何れも右手に強く感應します。

胸部と背部の診断

- (一) 右手を患者の胸部に當て、左手を患者の背部に當てます。
 (二) 右手を患者の背部に當て、左手を胸部に當てます。
 胸部に悪い處のある場合は(一)に、背部に病ひがあれば(二)に、何れも右手に感じます。

腹部と腰背部の診断

- (一) 右手を患者の腹部に當て、左手を患者の腰背部に當てます。
 (二) 右手を患者の腰背部に當てます。左手は患者の腹部に當てます。
 此の場合腹部に病氣があれば(一)の場合に、腰背部に病があれば(二)の場合に、何れも右手に感じます。

全身の診断をする場合には、以上の操作をすればよい譯ですが、より簡単に知る場合は、患者の両手の甲へ(合掌させて置いてもし)術者の左右の手掌を交互に當て、診ること又兩足の甲に同じ操作をして見ると、右手に強く感じたに、その患者の病氣があることが判ります。

但し診断の場合には、術者は何處までも精神を統一してかゝることです。此の場合雑念があつては往々にして診断を誤る虞れがありますから、呉々も注意を要します。

森氏の觸手療法は從來ありふれの同法とは全く其方法を異にせる處多し。若し森式治療法の極致を得んと欲せば、宜しく直接指導を受けらるべし。
 講習期間………一週間………會費金參拾圓也。

會場………東京市荏原區小山町三二〇番地東京心靈學協會本部

一四、小野式血液循環療法

多士濟々たる男子療術家に伍して寸毫も遜色なく、眞に萬緣叢中の紅一點として活躍してゐる女子療術家に、小野式血液循環療法の創始者、修靈會長小野乃布子女史がある。女史は故夫君の腦溢血症を治癒すべく精神療法を研究すること十餘年、遂に觸靈法に依つて人體の血液循環を旺盛にし、以て各種疾病を治癒し得ることを發見された療術界の新人として、將來を矚目せられて居る。女史はその性格上名利を求めざるが故に、未だ廣く世間に聞えて居らぬが、東都にては女史の血液循環療法に歸依する者も決して少なく無い。

女史にはまだ其の治療法を説明した著書が無いので、本項を草するに當り、特に女史を煩はし、其の精髓を發表して戴いたのが左の通りである。
 凡そ「人生最大の幸福は健康に在り」と云ふ諺がありますが、如何に物質的満足の

地位に在りましても、一朝心身の不健康に陥りましたときは、何等人間たるの意義も價値も無くなつて仕舞ひます。茲に於て此人生最大の不幸を救はんが爲には唯物文明の結晶たる醫術あり、藥學あり、化學あり何れも日進月歩長足の進歩研究がされまして、又顯著なる効果を成して居るのではあります。醫藥ばかりを主觀的にしてはなりません。なせなれば、人間ばかりではなく、動植物に至るまで宇宙の大自然に依つて其性を享けて居ると云ふ事を直感したとき熟々悟る事が出来るのであります。之れを理論的にしますと、少し熱がある様であるとする。先づ體溫計を狭んで見る、三十九度ある、それ醫者よ解熱藥よと騒ぎ出して、一室に布團を被つて安靜状態にさせられて仕舞ふ。翌日は解熱どころか反對に四十度にも昇ると、さあ氷嚢となる。ところが、日露戦争又今度の上海事變にも實例があるが、發熱しても體溫計の用意どころかそんな贅澤な事は言つて居られない。どうせ死に直面して居る體である。寧ろ志願して一刻も早くお國の爲め死んで仕舞ふと、砲煙彈雨の中へ決死隊として飛び出して戦

功を建て、扱て戦鬪が濟んで見るとグラ／＼する、高熱は何時か無くなつて居たと云ふ實例、又關東の大震災當時、震災の驚きで何時の間にか跛が癒つて居たと云ふ奇蹟的實例を多々耳にして居ります。之れは何故でしやうか。高熱が平熱になつて居たり、跛が癒つてしまつたと云ふ事は、宇宙の大自然に依り與へられたる自然の治癒力に依ると云ふ事ではありますまいか。人間は氣に依つて生きて居るからであります。熱があつて大變だ／＼と思ふ氣と、何糞どうせ死ぬなら病氣で死ぬものか、お國の爲め彈丸で死ぬと云ふ氣とは、氣分に於て非常な差異があるのであります。前者は自殺的行爲で、後者は自活的行爲であります。所謂精神の持ち様如何に依つて、死活の分岐點となるのであります。最も近い例は、寒いときア、寒いと思へば全身肌に粟だちますが、何寒く無いと力む、即ち丹田に力を入れた瞬間に寒さを忘れてしまふではありませんか。病氣とは氣を病む、即ち心が病むと云ふ事になるのではありませんか。然れば人間には自然の癒能と活力精神作用に依つて、病患何ものぞ恐るゝに足らずと

云ふ事が出来るのではありますまいか。生理上斯くの如き結構な作用があると云ふ事は誰しもが認めて居るのでありますが、未だ之れを強力化し活用させて、健康な體の保有者たる事を知らない人が多いのであります。

最近没せられた東京瀧野川區西ヶ原の禪宗昌林寺の住職鳥栖越山老師は百十四歳で天命を完ふされました。此老師が氣分が勝れないのを見て、醫者が薬を薦めても「天命を知る者に薬は無用」と、斷じて醫薬を攝られず、死の三時間前に自ら引導を渡して瞑目された大悟よりは、當時(九、三、二八)の各新聞紙上に掲載されて世人を驚かしたのであります。此老師生前中の百十四年間中には、風も引かれたでせう。又胃腸も患はれたでせう。腰の痛んだ事もありませんでせうが、大自然の治癒力は遂に百十四歳の高齡に達せしめたのであります。之れを見ても、大自然の治癒力の偉大を想ひ起す事が出来るのであります。

大自然の療能力とは何か

先づ身體を靈と精神と肉體の三大別にして考へて見る必要があるものであります。肉體の活動は交感神経と運動神経の二種別に依て支配されて居るのであります。而て交感神経とは、神とも大生命とも呼ばれる、靈より享けるところの活力、即ち心靈なるものを吾々身體の各細胞と器能とへ運ぶものである。故へに心臓の鼓動にせよ、血液の循環にせよ、呼吸、消化、攝取、排泄、分泌其他一切の活動は、皆此交感神経の支配に依つて働いてゐるのであり此神経作用に依つて絶へず體内に化學的・心理的の奇蹟が行はれて居る譯でありますから、一朝此神経が鈍るときは運動神経が鈍るから、血液や淋巴液が不循となり、劣悪となり、従つて老廢物病原質有毒素が體内に堆積をする故に身體は病菌の醸造所となつたり、或は病菌が浸入をして生きたる細胞の破壊をし遊走細胞即ち白血球の活動が鈍るのであります。此白血球と申しますのは、血液中に

在りて營養素に養はれて居て、肉體の組織内に異物、殊に病菌の浸入した場合、此菌を喰うて害を未然に防ぎ、又は死滅した體細胞を喰ひ盡して、掃除の役目を爲すものであつて、又血液中のみならず、所謂アメーバ様の運動を起して組織内にまで遊行して肉體の抵抗力を旺盛ならしめる使命を掌るものであるから、肺病の如き此白血球の衰退に依つて犯さるゝ事になるのであります。總て肉體の抵抗力の減退は、病氣に罹り易い體質となり、或は老衰者となるのであります。

自然癒能力とは即ち此白血球の活動力を第一とせねばならないと云ふ事になるのであります。病菌は遍在的性質のものであるが故、空氣中にも飲食物中にも、寄生或は潜在して絶へず吾人等の體内に進入して居るのであるから、到底病菌と無關係になる事は難しい。乍然血液の循環が完全に圓滑になつて、淋巴液を健全たらしめば、血液中の白血球の働きに依つて病菌は清掃されてしまい、老廢物や病的物質は自然的に代謝する。愁いも無くなり、健康體となるのであつて、病菌其物は少しも恐るゝに足ら

ず、又總てに障害の起る筈も無くなるの理であります。假りに指を切つたとしますと其處に出血をして痛みを感じます。之れは血液の循環が中斷阻害されるから痛むのであることは勿論であります。そこで白血球の働きに依つて(自然の治癒力)癒着をするに従つて、痛みが減退するの理を以ても、如何に血液の循環が活力素となるものであるかは誰しも良く御承知の事である。

血液循環療法とは何か

そこで如何にして血液の循環を旺盛ならしめ不治の病を征服せしむるか。

交響作用 先づ術者は身心一如の統一法所謂氣海丹田に力を罩め、即ち精神統一法を行ふのであります。此修養が第一の必要條件であります。精神統一法に就ては諸先生方に依つて御著述になつてあります様ですから、其方法の如何は別として十二分の研究と修養が必要であります。而て此の身心一如の統一法に依つて心靈力を誘起する

のであります。術者の心霊力を以て病者の弱き心霊に對し「病氣は必ず治る、治して見せる」と云ふ偉大なる信念を透徹せしめる、即ち感應作用に依ることは、所謂心理學上の身心相關を基礎とする譯で、心靈を患者の身體に感應せしめて自然の治癒性を誘導するのであります。術者が此妙諦の神境に到達するを得ば、單に此統一法に依るのみでも偉効ありとする譯であります。

私の施法は、多くの場合病者の肌^{はだ}に直接觸れる事を避けて居りますから、着衣の上から施術をすれば夫れで充分なのであります。

觸靈作用 觸靈作用とは現今行はれて居る所謂指壓法と略ぼ似て居る様ではあるが大部異つて居るのであります。指壓法を以て治療せらるゝ多くの方は、唯單に要點を押壓すれば良い様に思つて居らるゝかの様に窺はれますが、夫れでは何々温灸とか、何々電氣療法と云ふてあります如く、靈力の這入つて居ない、つまり魂の籠つてゐない器物的働きとなつてしまひます。唯單に温いから氣持ちがよいと云ふに過ぎない事

になるのであります。觸靈法を行ひますには、靈波を指頭から病者に傳へるのであります。此靈波とは所謂動物電氣であります。精神統一法に依つて誘起されたところの靈波を病者の各要點に觸感せしめるのであります。人體細胞の活動を喚起旺盛ならしむるので、そこに一層完全なる治療法となるのであります。

何故に此手指頭をスイッチとして使ふのでありましょうか。夫は人間の手指程交感神經(靈)の直感をし易い部分は無いのでありまして、肉體中尤も微細な働きをするからであります。例へば盲目者の點字を指頭に依つて讀み、或は微細の機械の製作に働く所以であります。偶々統一法に依つて手指頭に發靈を感ずる時、鏡に指を接觸せれば微かな曇りを表すを以て見ても、手指頭よりは一種のエネルギーとでも申ましようか、發散すると云ふ實驗にても立證せらるゝのであります。

觸靈法を施す方法と箇所 先づ觸靈法を行ふには病者を俯臥させ(腹這ひ)病者の兩手は體に添へて長く延ばさせ、足も長く延ばせて極く樂な姿勢をとらせませす。術者は

心身一如の統一法を行ひ、兩手掌を重ねて第一胸椎骨より第五腰椎骨に至る（脊髄骨上）各椎骨上を横に静かに押壓します。

第一、押壓方は極静かに徐々力を加へると共に、微震動を與へます。其程度は術者の丹田に充分力の籠つた時を押壓の程度とし、次に緩めるときは鼻孔より徐々に吐き出す呼吸に従つて静かに緩める。之れを第一胸椎骨から第五腰椎骨上を順次靈壓を反復すること四回乃至五回致します。之れは即ち椎骨の歪向亞脱臼の矯正を爲して、神経系統の中樞機能を完全ならしむる爲めであります。例へば讀書に沈るとか、或は裁縫に忙しいとき「肩がこる」「頭が重くなつた」と云ふ人は、必ず此脊髄骨の何れかに歪向亞脱臼をした部分があるのに原因するのであります。脊椎神経系統が亂れて來ると、血液循環の不圓滑となるからであります。其時に脊椎に靈壓を加へますと「コツリ」と音がして正位に復するのを實感する事が出來ます。

第二、前述の靈壓を了りましたならば、兩拇指頭（アトノ四指）にて第一胸椎骨より第

五腰椎骨の（脊髄骨の）軟骨の部分、つまり椎骨と椎骨の間の凹になつた部分を靈壓します。靈壓方法は前述に同じくし二回乃至三回とする。

第三、脊髄骨を境として、兩手掌を併置したる兩食指の上部の位置を定め、第二のとき同様拇指頭を以て胸骨と胸骨の間に靈壓する。此場合に母指以外の各四指は、常に適宜に病者の體に接觸せしめ、拇指に力を罩めて押壓する場合、其指先きの狂はぬ爲め定規の用に備へる事却つて便利とす。此場合は四指に力を入れぬ様特に注意を要します。

第四、第三の場合と同様脊髄骨を境として併置したる手掌の各中指の部分の上部の位置を第二第三と同様の靈壓を加ふること。

第五、第二第三と同様として小指の上部の位置に靈壓を加ふること。

第六、臀部下溝の中央に強く靈壓を加ふること。

第七、第一より第五までの順序を終りたるときは、病者を仰向きに臥せしめ、四肢

は俯臥と同じく延ばさせて、胸腹部に靈壓手掌法を行ふ。靈壓手掌法とは術者の兩手掌をば指を伸ばして掌と掌を重ねて、左右の腕はなるべく張らぬ様にして病者の胸部上に置き、下になりたる手掌の四指頭と手掌ら上方の軟部のところにより交互に軽く揉むかの様にしながら、上の掌にて極めて細かき微震動を與へながら、靈壓を加へるのであります。之れを行ふこと約三十分間位を適度と致しますが、最初は患部に靈痛を感じ、不快なる如きも、兩三回の後は嗜眠を催して來るを例とします（或人は腹を揉むのかと問ふ人がありますが決して揉むものではありません）本療法中は常に病者の顔面に注意して、其顔色及顔の顰め加減に依つて斟酌する事が最も安全であります。此心懸けを以て初めは餘り痛みを訴ふる程力を加へず、回數の重ぬるに従ひ漸次に力を加ふる様にするを良とします。

第八、次に左右股關節部、下肢前側、外側、内側、後側、に靈壓を加へ、左右上肢内側部に同じく靈壓を加へます。方法は第二、三の要領とします。

第九、頭部は前額部より後頭部に至る中心線を定め（前額部は正中を上間髮際部に）前額部より顛頂部、延髓を主要點とし、其他右主要點の中間部及前述中心線に左右へ併行線

を定め、前述の主要點と同一併行部に靈壓を加ふ方法は、第二、三の要領に依る。
第十、延髓より左右頸靜動の兩脈部、肩胛骨と鎖骨の中間所謂肩の部位を上膊臼骨上部へ向け第二、第三の要領を以て靈壓を加ふ。次で額へ右手掌を當て左拇指を第一頸椎骨部へ當て靈壓を加ふと同時に、急に右手掌を以て頭部を反轉させること。

以上の靈壓の各方法に依りまして亢進、鎮靜、誘導等の諸作用を起しますから、血液の循環は勿論身體各部の諸機能を正調し、神經機能より起るところの月經閉止或は利尿便通等の排泄を促進又は整定させ、營養機能を喚起亢奮復活をさせるに至り、疼痛（神經痛の如き）痙攣等を緩除し、嘔吐下痢等を鎮靜の作用を爲すが故に、血壓亢進を整調し、諸症の病患に効果あります。

以上は小野式血液循環療法の大略を述べましたものであります。序にこゝに注意し

て置きたい事は、呼吸器病者の胸部と妊婦の腹部に觸るゝ時は、餘り強く靈壓を加へざることも、又傳染病者には絶對手を觸れざることを附記して筆を擱きます。

數千人といふ専門家ある東都療術界に在つて小野式療法に歸依するもの益々その多きを加へつゝある傾向は、婦人だけに極めて眞面目に後進を指導する懇切にして、病弱者に接する親切なるの證左であらう。以て其の治療成績の如何も察せらるべし。

講習期間……一週間……會費金貳拾五圓也。

會場……東京市牛込區辨天町百十一番地修靈會本部

一五、靈氣と術 富田流手あて療法

誠實熱心なる研究家として知られたる手あつて療法會長富田魁二氏は、其著「靈氣と富田流手あて療法」に、「人間苦の内、病氣程痛切に感ずる苦勞はない。此の苦勞を醫藥に頼らず時日を費さず經費を要せず完全に自身で治療出来るのは本書の特長である。本書は自然の療能を其の儘應用して簡單で平易で一讀すれば誰でも出来る事を説明したものである」といつて手あて療法を禮讚して居られる。讀者の中には單に患部に手をあてた丈で病氣が治るといふ事が世の中にあり得るか。若しあるとしても果してそれが現在治療界の要求を満たし得るや否や、等の疑問を生ずる者もあらんが、氏は飽くまで理論に走らず二十星霜に亘る永き體驗を基調として平易簡單に且つ懇切丁寧にしてその然る所以を闡明立證されて居る。今茲に其の修養の順序と要領を摘録すれば、

修養の順序

一、動物は凡て自然的に療能作用たる靈氣を具有してゐる。二、人の手からは此の靈氣を放出するものである。三、其の手を局所にあてると、病氣の治る作用が起る。四、如何なる病氣でも根治性に有効である。五、此の自然療能作用の發動は人智を以て左右することは絶対に出来ない。以上手あて療法は五原則から生れたのであるが、之を實行するには先づ手掌より原動力たる發靈を第一とする。そして發靈した手掌を病氣の個所に當て、病氣を治すのが第二である。掌より發靈せしめ之れが自分で判るやうになる爲めには、下記五日間繼續修養法を以て一修養となし、之れにて相當の治病能力は得られるのであるが、尙此の修養方法を繰り返しく修練すれば、治病能力は益々熟達する事は言ふ迄も無い。

昔の名僧智僧と言はれた賢哲は、一寸其の手を患部に觸れた丈で、色々な病氣を治

したと傳へられるが、之れは決して一朝一夕に得られたものではなく、不斷に此の手あて療法の根本をなす修養を繼續し、之を蓄積した結果に外ならぬと思ふ。此の程度にまで達するには、我々凡人としては尋常一様の修養では出来得ないのであらうが、併し、修養を重ねて或る時間を治療に費せば誰人でも病氣を治癒し得るの能力は確實に得られるものである。今其の修得法を順序を逐ふて述べる事にする。

修得の仕方

静座 此の靈療法を修得するには、先づ静座をして心身の平靜統一を企るのであるが、最初静座するには静かな所を選ぶか、或は夜分静まつた時を利用するのが有利である。静座する時には、次の注意を必要とする。

イ、正座でも片膝座禪でも自由であるが丹田を壓迫せないやうに座るが良しい。正座の時は兩膝頭を少し開く事。

口、脊椎は成るべく垂直にするのが宜しい、之れは久しき静座に堪ゆる姿勢である
但し無理に垂直にするのは良くない。

ハ、瞑目、開眼は雑念を招き随つて精神散亂し易きを以て瞑目して之れを防止する
のが有利である。

(合掌) 静座したら次に合掌に移るのであるが、此行の目的は心の力所謂靈氣を
掌に集結せしむる手段であるから、大凡次のやうな要領で行ふ。

肩と臂に力を入れない様に両手を合す、肩は下方に下げる氣持で、臂は軽く兩脇下
に接して合掌を支へ、五指は揃へて兩掌を軽く接着せしめ、掌内に真綿を挟んだ様
な氣持になる。

(淨心法) 静座合掌の姿勢が出来たら、淨心法と言つて、一層精神を清淨にし、統
一する爲めに明治天皇の御製を一首奉讀し(心の中で)此の御製にあらはれた大御心に
自分の心を照して直ちに之れを奉體するのである。是れが爲めに 御製四五首を次に

謹掲する。

明治天皇御製

いかならん事にあひても撓まぬは

わがしきしまの大和魂

あさみどり澄渡りたる大空の

廣きを己が心ともがな

いつかたに心さしてか日盛の

やけたる道を蟻の行くらん

大空に聳えて見ゆる高嶺にも

登れば登る道はありけり

雨だりに回める石を見ても知れ

かたき業とて思ひ捨てめや

遠くとも人の行くべき道行かば

危きことはあらじと思ふ

善悪を人の上に言ひながら

身をかへりみる人なかり息

(發靈法) 斯の如くして心身が靜淨になつたら、此の心持を基礎として靜座を繼續する時は、心は自然に清くなり合掌して居る掌に溫熱が湧出して來るが、之れを靈熱と名づけて居る尙心身の調和が得られるに隨つて更に軽く電波様のものが、ピリ／＼と、掌に感じて來る様になる。此の溫熱と(ピリ／＼感するもの——私は之れを靈波と名づけて居る)靈波との合體が此の療法の主體となる靈氣の發動である。最初は此の感じが薄いが、段々靜座の調子が良くなるに隨つて強く感する様になつて來る。

又心身が調和するに隨つて其の感じも敏感となり、之れと反對に心身の調和が亂れ

るときは自然に消失せられる性質のものである。

靜座は心身の調和を求める手段方法であるから、身體の中央即ち丹田に心を置かねばならぬ、又何事に遭遇しても亂されない様に調和の力を求めねばならぬ。心身の調和力が整ふて來れば、合掌の發靈もそれにつれて増加して來るものであるから、此の心身状態を自分で練るのが靜座の修養である。

一靜座の時間は一時間位が適當であるが、座ることに馴れない人には無理であるから段々馴れるに隨つて、時間を延長して行くのがよい。

最初此の修養を始めたなら五日乃至七日連續するのがよい。不連續的に思ひ出した様に靜座するのは効果が尠ない。

今試みに、五日計畫の修養要領の大略を示すと、次の如くである。

(五日計畫の修養要領) 第一日 前に述べた要領で三十分間位靜座する(一時間出來れば有利である) 此の時靜座合掌淨心法が終つた頃に數回深呼吸を行ふと心身の調

和が容易である。此の日の静座の終りには合掌して居る掌に、靈熱を發して來ることに注意して居れば之れが感知出来るものである。

第二日 三十分か四十分位が適當の時間である。御製の奉讀は勿論前記修得の方法を通讀し更に、前日の静座氣分を喚び起して、夫れに引續いて静座を重ねるのであるが、此日の静座の終りには合掌の掌に、靈熱も増加して來るが其外に、ピリ／＼としたシビレタ様な感じを感知することが出来る様になる。

第三日 四十分位が適當である。静座の意義及び心得を喚起追想して、謹嚴に御製を奉誦するのである。斯の如くにして静座氣分を増進せしむる時は、靈熱も追々早く出るやうにもなり、ピリ／＼する靈波も強く感じて來る。此の靈波を體得するには次の方法で練習すると早く體得が出来る。

静座の終り頃に合掌して居る手を静座氣分を亂す事なく左右に二三寸位徐々に開くとピリ／＼する靈波は大きく兩掌に感ずるものである。又靜かに元の合掌に歸る時は

兩手が吸ひ付けられる様な感じがする。此種の練習をする時には、特に静座氣分を亂さない様に注意せねばならぬ。

右の練習を四五回繰り返して見る、と靈波の感じを體得することが出来るものである。

第四日 四十分か五十分位が適當。静座合掌して御製を奉誦すると、前日の心理状態が心に早く浮んで來る様になる。随つて静座氣分も早く整つて來る。合掌の掌も同じ様に發靈して來る。二十分間位静座が進んだ時に、今度は兩手を握り合せて膝の上に置き、静座を繼續してゐると發靈の調子が合掌の時と同じやうになつて來る、約十分間位過ぎたら再び合掌に移ると一層發靈の調子が整つて來るものである。更に十分間位合掌した後、今度は掌を直角にして右手を左掌内と二三寸位、隔を置いて静座の氣分で居ると、左掌内に一ヶ所細い風が當る様に涼しく感ずる所があるが、これは右手の中指を中心として放射してゐる靈氣が左掌内に當る爲めに感ずる感じである。隨

つて右手の方向を左掌内随意の處に換へれば其の換へた所に其の感じが移動して行くのは當然である。此等の練習を静座と交へて行ふ時は、發靈及び靈感を體得するに大變有利である。此の練習を行ふ時最初の内は成るべく閉眼の方がよい。此の練習の終りたる時は再び合掌に歸り、更に御製一首を奉誦して其日の静座を終る。

第五日 一時間位が適當である。静座の要領は前日の通り進めねばならぬ。御製を奉誦して約二十分間静座合掌してゐると、靈熱も靈波も調子よく發動して來るから、今日も前日と同様の練習を二十分間位するのもよい。夫れから合掌に移つて又二十分位すると發靈の調子が整つて來るから其時、肩の凝つてゐる人の肩に右手を當て、左手は膝の上に置き今迄と同じ氣分になつて約十五分間位手を動かさず(一ヶ所)に當てた儘居ると、手から出た靈氣が肩の凝つた人に移つて行く爲めに(治療)手を取ると、肩が軽くなつて良い氣持になり、凝りが解けるのである。此時肩に當て、ゝゝゝる右手にビリ／＼「シビル」のやうな感じがするが、之れを病感と名付けて居る。若し其の病

感が判らなかつたら右手を肩につけた儘で左手(膝の上)と其の感じを自分の心の内で比較して見ると、感じが異なるものであるが、其の異なる右手の感じが皆病感である。此の程度まで出來る様になつたら初歩としては先づ卒業である。此の基礎を尊重して是れを幾回となく繰り返し繰り返し、數多くすれば立派な治療が出來る様になる。

自己治療法

此の療法を修得して人の病氣は治せるにしても、自分の病氣が自分で治せるかと問ふ人がある。其の答へに自分の病氣が治せない様な事で、他人の病氣は治し得るものでは無いと云はねばならぬ。

併しながら、治療法としては完全に出來るわけだが、手あて療法は自分の身體に、自分の手の届かない所がある。又届いても無理があつては、或る時間堪へられぬので、十分には出來ないと云ふことは止むを得ない。

自分の身體に自分の手をあて、治るの理由を一寸不思議に思ふ人もあるだらうが、人の治療も自分の治療も効果には實際變らぬ性質を有つて居る。

静座合掌した時の手（靈氣の放出して居る手）は、身體の健康素を集中せしめたこととなる。病氣の個所は、生理組織の缺陷や、其の他種々なる障害の爲めに、健康素（靈氣）の循環が不十分であるから、病所は、此の健康素が缺乏して居ることにある。

此の時、靈手を直接病所に當てる時は、病所は手より其の要素を吸収するものであるから、其の結果は他人治療と何等異なる所なく同一効力を奏するのである。隨つて病感の感受も他人診斷と同じである。

自體の靈素を自體が吸収すると云ふ事は、結局同じことになり、其の間何の得る所なき様にも考へらるゝが、治療効果の擧がる處より見れば生理上合理である。

要するに、病所に靈手を當てると、治療効果は擧がるが、自己治療で一番の難關は、自分自身が病氣の爲め、苦痛に堪へ切れざるの時にあつては、發靈作用も實に減退せ

られるので効果が擧がらないのは止むを得ん處であるが局部的打傷とか「ヤケド」の如きものは自體が健康である爲其の効果は他人に施すのと相等的なものである。

自己治療法は右の如き性質故、完全に成立はして居るが他人治療程充分に行かないのは、止むを得ないのである。毎日の疲勞の恢復、局部的治療等には便利此の上なく、平素暇ある毎に自體の治療を行ふ習慣にすると、豫防醫法上偉大なる結果を求めることが出来る。治療法としては他人治療と同じである。

治療の要領及び心得に就ては富田魁二氏著「靈氣と仁術富田流手あて療法」(定價金貳圓八拾錢送料十四錢)を通讀すれば、全部詳密なる圖解を入れ説明せられたるを以て、何人にも容易に了解實行し得らるべし。

講習期間 初傳、中傳、奥傳……各五日間
初傳……金拾圓也。 中傳……金五圓也。

奥傳……金五圓也。

皆傳……十五日間……金參拾圓也。

會場……大阪市港區市岡中學校正門前手あて療法會

斯界權威 十五大家 靈療術聖典終

昭和九年六月三十日印刷
昭和九年七月十日發行

靈療術聖典

非賣品

編輯者

靈療術研究團

發行者

東京市京橋區京橋二丁目九番地
須藤善四郎

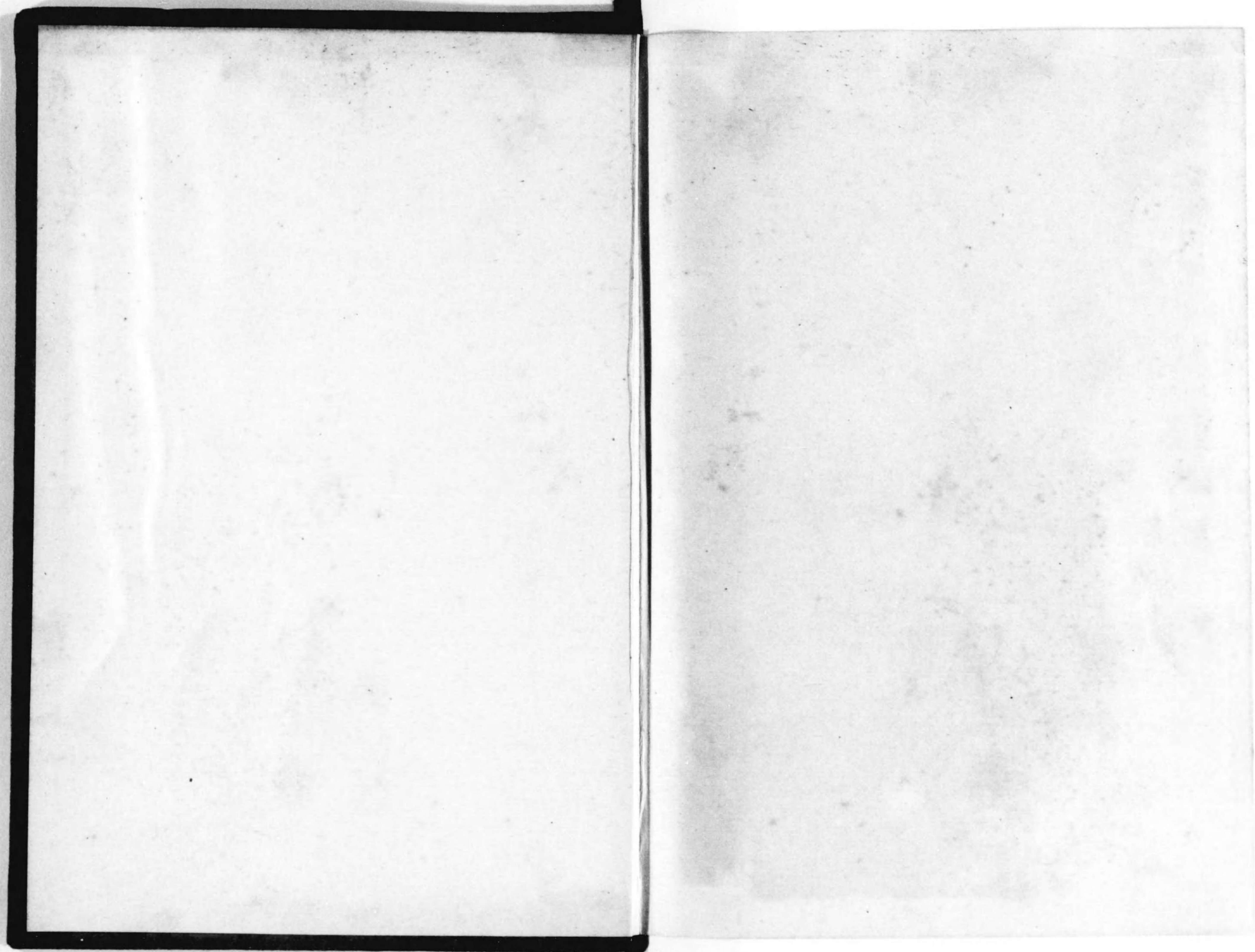
印刷者

東京市赤坂區青山北町一ノ四
猪平正綱

不許
複製

發行所 東京市京橋區京橋二丁目九番地 振替東京四五〇九二番 天立洞本院

7.13



終

